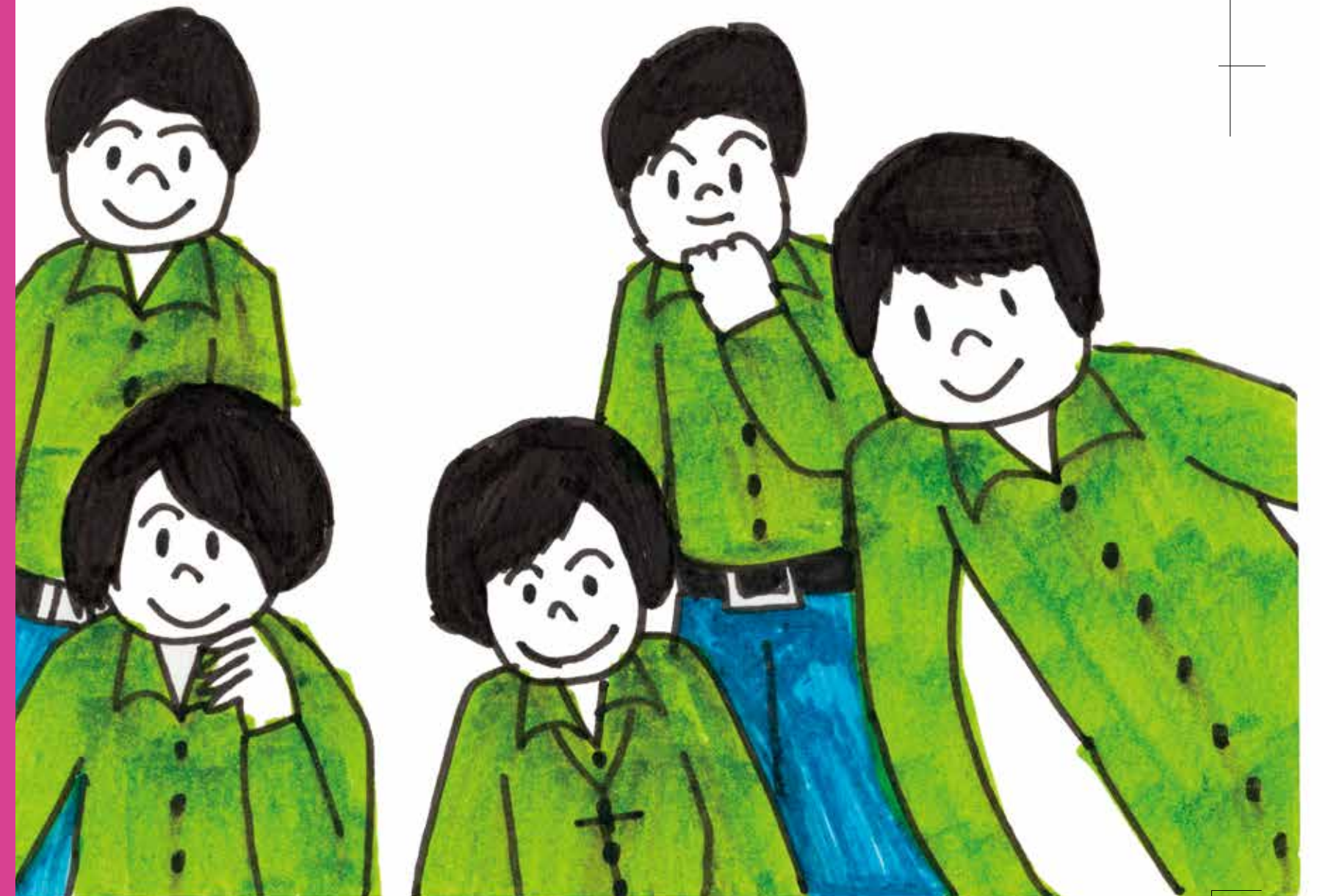


ART(s) さいほく

厚生労働省
令和2年度障害者芸術文化活動普及支援事業
南関東・甲信ブロック
広域支援センター事業報告書
社会福祉法人 昴 ART(s) さいほく

ART(s) さいほく
社会福祉法人 昴 ART(s) さいほく



INDEX

- 1 はじめに
- 2 令和2年度 南関東・甲信ブロック広域支援センターART(s) さいほく
設立の経緯
- 3 事業内容
- 4-5 訪問・調査の実施
- 6-7 ブロック会議の実施
- 8-9 南関東・甲信ブロック支援センターの紹介
- 10-11 アートセッション in 横瀬～表現のタネたち～について
- 12-21 出展者の紹介
- 22-23 イベント実施報告「おどりに生きる」
- 24-26 出展者・周囲の人の声
- 27 来場者の声
- 28-35 続編企画 表現のタネたち part 2 座談会
- 36-41 人材育成研修会『コアチョコ流Tシャツの作り方』
- 42-46 支援センターへのヒアリング
- 47 コロナ下で制作された作品
- 48-50 評価委員会実施報告
- 51-52 今年度に向けて事業評価と今後に向けて
- 53 本事業における専門アドバイザー



はじめに

私たちの新たな船出は、順風満帆とは行きませんでした。政府が発出した緊急事態宣言下で、最初の仕事は、南関東・甲信ブロック内の各都県障害者芸術文化活動支援センターに対して行った「コロナ禍における事業の実施状況」についてのヒアリング調査でした。調査の中で、ある支援センターは、「芸術文化は命の次に必要とされている」と表現していました。その後、新型コロナウイルス感染の拡大により、人々の生活から芸術や文化、娯楽が徐々に奪われ、生活の豊かさや潤いが失われました。

この状況下で、各都県支援センターは工夫を凝らし、障害ある人々を含む「地域の芸術文化の火」を絶やさぬよう努力してきました。例えば、オンラインを活用した障害者作品展 選考会の実施や相談支援など、この状況を逆手にとってこれまでアクセスできなかった人々も参加できるようにするなど、障害者芸術文化のすそ野を拡げてくれました。

エッセンシャルワークといわれる障害福祉の仕事に携わる仲間へ、コロナ禍中での生活支援の継続に敬意を表します。そして、今回の障害者芸術文化における私たちの知見蓄積が、未来に活かされることを願ってやみません。

最後ではありますが、本事業や本報告書作成にご協力いただきました全ての皆様に、厚く御礼申し上げます。



ART(s) さいほくについて

設立の経緯

平成 12 年 2000	「ART(s) さいほく」の実施母体である社会福祉法人 昴が、在宅障害者向けレクリエーションクラブのプログラムとしてアート活動を開始。
平成 22 年 2010	法人内の生活介護事業所の日中活動プログラムとして、アート活動支援を本格的に始動。 同年、東武東上線武蔵嵐山駅内で、初めての障害者アート展示会を実施。
平成 24 年 2012	当法人が出資し専任職員を配置して、「NPO 法人かうんと 5」を設立。 地域で暮らす障害のある人たちのアートを中心とする文化活動の支援、作品を商品化して障害のある人たちの収益事業を開始。 また、生活支援全般や権利擁護を通して障害のある人たちの地域生活の安定継続に寄与することも目的として活動。
平成 25 年 2013	ロック＆アートイベント 「花園ロックンロールショー」
平成 26 年 2014	日本赤十字社埼玉支社旧社屋等の文化財を活用した障害者アートの展示イベント「アートセッション in らんざん」を開催。
平成 29 年 2017	アート活動支援拠点として、地域オープンスペース 「まちこうば GROOVIN'」を開設。 障害者の創作活動拠点のみならず、より広い地域住民の交流スペースとして開放。
平成 30 年 2018	「アートセッション in さいほく」を開始。 これまでの嵐山町に加え、本庄市、横瀬町、日高市の有形文化財を活用した巡回企画展を実施。 同年、文化庁委託事業である「障害者の芸術文化国際交流事業」実行委員会に参画。 「2019 ジャパン×タイプロジェクト」では、日本の優れた障害者アートグッズ等の販売主担当として、アジア諸国の障害者の地位向上に向け、障害のある人の可能性を示す作品や製品を紹介。
平成 31 年 2019	4 月より、埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業（特色型）の補助を受け、障害者相談支援事業所等と連携しながら、埼玉県北西部の在宅の障害者向け表現活動支援を開始。
令和 2 年 2020	本ブロック内で、障害のある人の表現活動推進に寄与していきたいと考え、東京アール・ブリュットサポートセンター Rights より引き継ぎ、南関東・甲信ブロック広域支援センターとして事業採択される。



事業内容

- (ア) 都道府県の支援センターに対する支援
 - 訪問調査
 - ブロック会議の実施
- (イ) 支援センターが無い都道府県の事業所等に対する支援
 - 訪問支援
 - ネットワーク形成プログラム・人材育成研修の企画
※新型コロナウイルス感染拡大により未実施
- (ウ) 芸術文化活動に関するブロック研修の開催
 - グッズ化研修の企画・実施
 - 地方自治体における障害者による文化芸術活動の
推進に関する法律に係る基本計画の策定の研修運営
 - 障害者芸術文化普及支援ガイドライン活用研修の企画・実施
- (エ) ブロック内の連携の推進
 - ブロック会議の実施
- (オ) 発表機会の確保
 - ブロック合同企画展の実施
 - ブロック合同イベントの実施
- (カ) 自治体における基本計画策定の推進
 - ブロック内都県障害者芸術文化活動推進基本計画策定委員会等への参画
- (キ) 自治体における基本計画策定の推進
 - アンケート調査の実施
 - 評価委員会の設置





訪問・調査の実施

今年度より、私たちの運営する「ART(s) さいほく」が、南関東・甲信ブロックの広域センターとなったことに伴い、各都県支援センターや都県担当者への巡回を実施。それぞれの課題共有と解決のために、広域センターとしてどのような具体的な支援ができるかを確認する、訪問・調査を行った。

主な目的は、以下の3点。

- ①新設支援センターにおける、「事業の実施計画」と「広域センターが行うべき支援」の意見交換
- ②未設置県における支援センターの設置に向けた情報及び技術提供
- ③合同展示に向けた作家・作品の発掘

①新設支援センターとの意見交換

当ブロック内で、今年度の新設された支援センターは、認定特定非営利活動法人 ST スポット横浜の運営する「神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター」と社会福祉法人フラットの運営する「千葉アール・ブリュットセンター うみのもり」である。訪問時の様子については、以下の通りである。

新設支援センター訪問記

千葉アール・ブリュットセンター うみのもり

2020年7月14日訪問

社会福祉法人 FLAT を運営母体とし、令和2年度より支援センターとして事業を開始。千葉県では障害のある人たちのアート活動に先駆的に取り組んでいる事業所はあるが事業所間の連携がまだまだ少ない状況であるという。芸術文化活動に取り組む人たちや事業所、作家等の相談先がわからないという声も聞かれ、令和2年度はネットワークの構築をめざし、まずは支援センターの存在、役割などを知ってもらうための取り組みとして人材育成研修に力を入れていく。センター開設のキックオフイベントとし、2020年7月23日（木）「海の日に表現の旅に出発しよう」と題した障害を持った人の表現とは何かを学ぶトークイベントをオンラインで実施。令和2年度は芸術分野・舞台芸術身体表現のワークショップを6回計画。発表の機会については、コロナ下での会場探し等も課題。千葉県は面積が広いので、ネットワークづくりは大切であり、情報収集や調査には力を入れていくとのこと。

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター

2020年7月22日訪問

ST スポットが福祉事業に取り組むまでの説明をうけた。小劇場として活動をスタート。子ども向けのプログラムに取り組む始めアーティストを学校へ派遣する事業を行ってきた。地域の文化運営団体との連携・活動の中で障害のある人たちとの芸術・文化を通じた取り組みも増え、福祉事業を始めるようになっていく。これまで ST スポットを利用していたアーティストとの連携を強めとし、各施設と話し合いながら、求められるワークショップに応えてきた。ダンスや病院の中でのバンド活動などとてもユニークであった。「地域・アーティスト・福祉」の hub 的役割を担っていききたいとのこと。「生活の中でハイアートだけではなく、小さい規模（歩いて行ける範囲の）の地域文化を育んでいきたい、このコロナ下ではあるが芸術や文化はとても大切なものであり、その灯を消さぬよう取り組んでいきたい」と語ってくれた。



②未設置県への設置に向けた情報および技術提供

支援センター未設置県である長野県に対し、設置に向けた準備を進めようと考えていたが、電話での状況等の確認を行ったところ、昨年度の台風19号東日本台風で長野県が甚大な被害をうけており復旧復興のさなかであり当初予定していた予算は見直されて復興中心に向けられており、センター設置の予算は確保のが困難という回答だった。

7、8月に訪問調査の打診をしたが新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、県をまたいでの訪問が困難なため実施ができなかった。



③合同展にむけた作家の発掘・調査

■作者の発掘【表現のタネたちを探す】

障害のある人たちの日常の中の『なんだか気になる』『どこか惹かれてしまう』行為や表現、また作品の制作の過程、加えてその表現をとりまく周囲の人たちのかかわり等に視点を注ぐことをポイントにした、『表現のタネ』の発掘を各都県の支援センターに依頼した。

その結果合同企画展にむけて17名表現のタネたちが揃った。

■アーティストの取材等

11月のブロック合同企画展アートセッション in 横瀬にむけて、各県から紹介をうけた作家への訪問 / ZOOM での取材を行った。

各福祉事業所や自宅に直接訪問をし、作者や家族、支援スタッフ等に会い、インタビューや作品の制作風景の見学などを行った。新型コロナウイルスの感染拡大の影響で訪問できない事業所には、電話やメール、ZOOM を活用して取材を行った。県をまたいでの訪問ができないところは、同県の支援センターが訪問し取材を行った。

■取材を通じて

各県から紹介された「表現のタネたち」は「日々のメモ書き」「毎日のお祈り」「つぶやき」「お守り作り」等生活感あふれるものや、フェイスブックへの作品投稿、声優になりたい、人形劇を大勢の人の前でやりたいなど自身の夢など、バラエティに富んでいた。

取材では本人だけでなく周りの人たちにも話を聞き、その表現や制作の背景も聞くことができた。彼らの表現を自分のことのように語ってくれ一緒に楽しんでいる様子が印象的だった。それ故にその表現や作品の魅力が倍增しているようにも思えた。またどの取材においてもとてもおらかな空気感を感じたことも付け加えておきたい。



ブロック内支援センターとの連携 ブロック会議の実施

南関東・甲信ブロック内での情報共有及び連携の強化、各都県支援センター間での相互の協力が促進されるよう、ブロック会議を以下の通り、3回開催した。また、障害者芸術文化活動普及支援ガイドを活用し、各支援センターでの1年間の取り組みを検証した。その上で、次年度の事業計画も視野に入れながら、各支援センター、事業実施状況の客観化や新たな気づきを持ち、課題を焦点化することで具体的な解決策を検討する機会とした。

第1回ブロック会議 情報共有の場

日 時：2020年7月30日（木）13：00～15：00

会 場：Zoomによるオンライン

参加者：17名（6支援センター、2県、全国連携事務局、厚生労働省）

内 容：①各都県支援センターの紹介と2020年度事業計画の共有
②南関東・甲信ブロック2020年度事業計画
③情報・意見交換（コロナ下における事業実施の工夫を中心に）

③情報・意見交換」で出た意見
＜支援センター＞

●展覧会の場所選びの幅が広がった（うみのもり）
展示をするにあたり箱（展示スペース）にこだわらない展示手段や密にならぬ広い場所を選ぶなど、コロナ状況に影響されない方法もあると感じた。
●予想外の対象者へリーチ可能に（集）
舞台芸術を土台に地域に根ざし活動してきた。しかし、現在の社会状況によりonlineやzoomでの開催を始めている。今までに遠方であることを理由にイベントが開催されている場に足を運べなかった方々にも事業が届く機会になってきている。

＜県＞

●ブロック間の開催手段等を情報共有したい（千葉県庁）
おそらく、今年度はonlineでのイベント実施は主流となるであろう。やってみて、できることを試し、

振り返りをしたい。その上で他都道府県へ日常的に共有できたらと思われた。

＜厚労省＞

●評価、支援についての振り返りの必要性
施設のonline accessibilityについて検討する機会を持てないか。施設によってonline環境ある、なしの把握。アクセス環境の整備を検討していく。
命に関わる対処、処置であることも念頭におく。
●新たな手段の創出を検討する
施設同士で行うonline WS、コラボレーション企画、研修等の検討をするのはどうか。誰にでも行き届く支援、センターでやり方を考えても良いかも。それを県内、全国へ広げることの重要性があるのでは？

第2回ブロック会議 合同イベントの企画

日 時：2020年11月10日（火）16：30～17：30

会 場：さいたま市市民会館うらわ

参加者：22名（6支援センター、5県、厚生労働省）

内 容：

合同企画展について出展候補者の紹介、内容等説明を行い、企画実施に向けての連携・協力を求めた。

コメント

本企画の出展者による日々の行為や表現には、周りの人たちも共に楽しんでいる様子が見えてくる。それらを展示・発表することで、障害のある人たちへの理解が深まっていくことが期待される。本企画の大きな目的のひとつを共有できたと思う。

ブロック会議でのプレゼン資料



第3回ブロック会議 支援ガイドを活用した事業成果の客観化

日 時：2021年2月26日（火）13：00～16：00

会 場：Zoomによるオンライン

参加者：19名（6支援センター、4県、全国連携事務局、厚生労働省）

内 容：①研修（支援ガイドを活用した事業計画と評価指標の作成について）
障害者芸術文化活動普及支援ガイドの活用した事業評価について
講師：清水 潤子氏（認定 NPO 法人 日本ファンドレイジング協会）
②各都県支援センターの情報共有

支援ガイドの活用についての研修会を通じ、本事業は最終アウトカム「芸術文化活動を通して、障害者が社会参加できるようになる」と中間アウトカム「芸術文化活動を通して、障害者が個性と能力を発揮できる」が共通の目標ではあるが、支援ガイドはただ横並びで同じ活動をするためのガイドではないことを改めて共有できたと考える。その地域の実情や支援センターの得手不得手などを整理し、各センターの強みを明確にし、それを活かした活動を展開していけばよく、不得手なところなどをお互いの連携で補えるよう、間にたちサポートするのが広域センターの大きな役割のひとつだということも理解できた。このタイミングでの研修会は、次年度の事業計画にも大きく役立ったと思われる。

南関東・甲信ブロック 支援センターの紹介

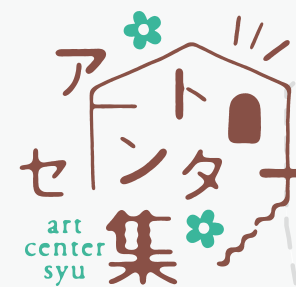
令和2年度、南関東・甲信ブロックで活躍する
各支援センターをご紹介します。



YAMANASHI ART BRUT
NETWORK CENTER

YAN 山梨アール・ブリュット
ネットワークセンター
〒408-0025 山梨県北杜市長坂町長坂下条 1237-3
TEL : 0551-45-7027 FAX : 0551-32-6351
mail : yan @ y-meisui.or.jp
web : http://y-meisui.or.jp/yan/

長野県
[未設置]



埼玉県

アートセンター集
〒333-0831 埼玉県川口市木曽呂 1445
TEL : 048-290-7355 FAX : 048-290-7356
mail : kobo-syu @ marble.ocn.ne.jp
web : http://artcenter-syu.com/

ART(s) さいほく

〒355-0077 埼玉県東松山市上唐子 1532-5
まちこうば GROOVIN' 内
TEL・FAX : 0493-81-4597
mail : arts_saihoku@subaru-swc.com
web : https://www.subaru-swc.com

東京都

東京アール・ブリュットサポートセンター
Rights(ライツ)
〒164-0001 東京都中野区中野 5-26-18
TEL : 03-5942-7251 FAX : 03-5942-7254
web : https://rights-tokyo.com/



山梨県

東京都

千葉県



千葉県

千葉アール・ブリュットセンターうみのもり
(美術・舞台芸術)
〒270-1431 千葉県白井市市根 200-37
(社会福祉法人フラット内)
TEL : 047-404-8188 FAX : 047-401-3375
mail : uminomori@flat.or.jp
web : https://uminomori.net/

コメント：千葉アール・ブリュットセンターうみのもりは、県内の4つの団体が力を合わせて「美術分野」「福祉分野」等と長所を生かすことにより、幅広く、そして奥深い事業展開を行っています。千葉県内では多くの作家が活動しているので、それぞれに光を当てる事、認める事、そして繋げる事を目標としています。これからの千葉県や日本の障害者芸術を盛り上げるために、少しでもお役に立てるよう尽力を尽くしますので、どうぞよろしくお願い致します！

神奈川県

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター
〒220-0004 横浜市西区北幸 1-11-15 横浜S Tビル 208
認定NPO法人STスポット横浜内
TEL : 045-325-0410 FAX : 045-325-0414
MAIL : info@k-welfare.org
WEB : https://k-welfare.org



コメント：神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターは、2020年4月より「つなぐ・つくる・支える」の3つを柱に、活動を展開してきました。コロナ禍の影響を受け、芸術家による福祉施設でのワークショップ実施や、障がい者の芸術文化活動を支えるコーディネーターの養成講座の開催などは、オンラインでの実施となりました。なかなか県内に出かけて行つての活動が難しい1年となりましたが、今後も障がいのある人が身近な地域で文化芸術に触れられるように、障がい福祉と芸術文化のネットワーク構築を目指したいと思います。

イラストレーション / コバヤシカオル

合同企画展：アートセッションin さいほく 2020 アートセッションin 横瀬～表現のタネたち～

本企画では日常の中の『なんだか気になる』『どこか惹かれる』行為や表現、あわせてその表現をとりまく周囲の人たちとの関わりに着目した17の『表現のタネたち』を紹介した。紹介した表現のタネたちはメモ書きや、お守り作り、お祈り、歌など私たちにも身近に感じられる表現だが、どれひとつとして同じものがなく、また周りの人のかかわりによって魅力も増していった。

あらためて私たちの日常には笑ったり、泣いたり、哀しんだり、怒ったり・・・豊かな表現であふれていることを感じさせてくれた。

本企画を通じ、お互いのことを思いやり、表現の豊かさ・楽しさを共有できたと考えます。

日 時：2020年11月20日(金)～22日(日)

場 所：あしがくぼ笑楽校（埼玉県秩父郡横瀬町）

出展者：17名

来場者：250名

beyond2020／横瀬町とコラボする研究所よこらぼ 承認事業

■目的 / ねらい

広域センターとの連絡会議や各支援センターとの意見交換の中で、「自分たちの事業所には、アートをやることが難しい利用者がいる」という声が多く聞かれる。しかし、障害のある人たちが芸術文化活動で作り出すものは、必ずしも世の中で言われる「作品」である必要はなく、一見作品とは思えないものの中にも創った人の思いが表現されたものが多数あることに気づく。支援者や関わる人たちが障害のある人たちの「表現のタネ」を見つけ出す視点を広く持って取り組むことで、芸術文化活動・表現活動がより身近になり、取り組みが広がっていき、それが障害のある人たちの「芸術文化活動の普及支援」という、本事業の根幹の目的につながると考える。

開催地横瀬町との協働を通じて、その町にある資源や魅力等の発見および活用をし、その町らしさも感じることができ企画にする。そして、地域との連携を学ぶヒントにしていく。

■作者の発掘 / 取材

ブロック内の支援センターに、作品展のテーマに沿った表現を行っている人や事業所を探してもらい、紹介をうけた。それをうけて、作者のご自宅や事業所への訪問取材、オンラインでの取材などをおこないながら準備を進めていった。

作者本人や支援者等実際に会って話を聴くことにより、その表現の魅力をより強く感じたことはいうまでもなく、携わる支援者、ご家族、友人等の話は、制作の背景、関係性など深く知ることができ、その表現の魅力を倍増させた。

短時間ではあるが取材を通して感じたのは、表現の場がとてもおほかたで心地よい空気感だったことである。



■地域との連携

あしがくぼ笑楽校は新型コロナウイルスの感染拡大によりしばらく利用ができず、再開の見込みも未定という状況であった。しかし、本企画の実施にあたり、横瀬町福祉課、まちおこし課等の尽力により使用再開の運びとなった。「だれかがやらないと、始まらない・町を元気にしたい」（横瀬町福祉課 邊見さん）との思いが本企画を後押ししてくれた。それだけでなく公民館のロビーや街のフリースペースも展示スペースとして提供していただき、道の駅や棚田を使った発表の場を自治会につないでくれたりと、地域にある資源を惜しみなく提供してくれたことは大きな収穫であった。



【コメント】

町には“その町ならではの”の力があることがわかった。そうした視点をもち地域資源の開拓・協働を支援センター同士の共有テーマとして、今後に役立てていきたい。
(石平)

■会場あしがくぼ笑楽校について

明治36年（1903年）に芦ヶ久保小学校として開校し、平成20年（2008年）に閉校。子どもから大人まで、笑って楽しい木造校舎「あしがくぼ笑楽校」として新たに再スタートし、映画やドラマの撮影、近年はコスプレの撮影会、会議や研修など、さまざまなシーンで活用。横瀬町の観光や産業、情報発信や人が集まる拠点として、地域の人たちをつなぐ新しいスポットとなっている。



（行政からの感想）

今回のアートセッションin横瀬は、単なる作品展ではなく、障がいのある方々の日常生活から生まれた表現に焦点を当てたものでした。作品や表現を拝見して、「障がいのある方の“これが好き”という気持ちが詰まっているな」という印象を受けました。そして、これらを掘り起こし、発信していく活動の面白さを実感しています。また、同時開催であった「おどりに生きる」も、コロナ禍でどこか活気を失いかけていた町に、明るい空気を生んでくれるような素敵な取り組みであったと感じています。

（横瀬町健康づくり課主事 邊見翔悟氏 ※令和2年度時）

17 人の 出展者



展示中各スペースにパソコンを置き、
出展者の日常等を伝える動画を流した。

酒井 都美子 東京

刺繍／私の気になるもの好きなもの

日中は事業所の織工房、紙工房で作業をしている。はじめは白い布に模様や絵を刺繍していたが、職員のいないところでコッソリと自分のポーチに刺繍をするようになった。(怒られてしまうと思っていたようだ)。職員はそれが、とても可愛かったので『素敵だ』と伝え、帽子を渡すとそれにも刺繍をはじめ、そして自分の着ている服にもこっそりと刺繍をはじめた。日々の中でいつのまにか始まり、増えていった刺繍たちである。



ちひろ（1994 年生まれ）東京

下着の絵

ちひろさんはアート活動の時間だけでなく、ちょっとした空き時間でも積極的に画材をセレクトし作品作りをする。

下着の絵、女の子、神様の絵などモチーフはその時々で変化していく。下着など独特なモチーフではあるものの、ポップでかわいらしく親しみやすい。また文字も個性的な形だという。かわいいものが大好きだ。

作品が完成するとスタッフのところに行き、作品のタイトルを言うようリクエストしたりスタッフとの楽しいコミュニケーションの時間をすごす。

完成した作品は、音楽プレイヤーでお気に入りの曲を聴きながら、机やいすの上に置いたり、宙にかざしたり、じっと見つめている。その姿はとても魅力的に見えるという。

また支援する周囲のスタッフも彼女の表現に意味や理由を求めすぎず、好きなもの、かわいいものをありのままに描く彼女のことを支えながら、一緒に楽しむことをとても大切にしている様子が、インタビュー等から伝わってきた。



横山 太志朗（2013 年生まれ）

戦車の絵

ロシアの戦車のアニメ番組をみたのが戦車の絵を描くきっかけのこと。

彼の描く戦車は擬人化され、それぞれに名前、性格、ストーリーがある。

朝布団から出るとテーブルに直行し登校するギリギリまで描き、下校後も寝る前まで描く。出掛ける時もスケッチブック、筆記用具は持ち歩いており、これまでに数百枚の戦車を描いているという。本物の戦車や戦車の図鑑よりも擬人化したものの方が好きようだ。

今は戦車に熱中しているが、何かのきっかけで描きたい対象が変わるかもしれない、描きたいものが切り替わると数ヶ月～年単位でそれを毎日描き続け、上達・進化しさらにオリジナリティが増していく。何かの真似から始まるものでも、最終的に自分のものにしていくところが面白いと母は語る。

展示当日は家族と訪れ、戦車の絵のことをとても楽しそうに、たくさん語ってくれた。その表情がとても印象的だった。



田中 郷 千葉

幻想であり真実の形

田中さんは自宅で作品を描いている。頭の中に浮かんだこと、言葉などからイメージを広げながら思いつくままにペンを走らせていき最後に色を塗り鮮やかな画が完成する。作品はフェイスブックで日々発表されている。投稿には作者の思いなども綴られており、投稿を見た人たちからのリアクションやコメントをもらうことが絵を描くモチベーションにつながるという。



黒杭大朗（1965 年生まれ）千葉

メモ帳

小さなメモ帳の極小の文字は就寝前にルーペを使いながら書かれている。好きな数字や予定、様々である。黒杭さんは日々の中に細かいルーティーンや独自のルールを設け生活を送っている。

特に数字に関することが好みであり、数字をひらがなや英語におきかえ、語呂合わせのような言葉遊びを職員とともに日々楽しんでいる。

一例をあげると

2=ひらがなの“ふ” ふ110=夫婦で110番 警察へ行く

1=A 2=B 3=C（以下・・・）

223はBBC（イギリスの放送局） 63はFC（フランス）

など、一見ただけでは理解が難しい数字・語呂合わせも、日々のスタッフとのやりとりの中で解読され、またそれらが日々の話題として広がっていった。



堀畑 孝太 千葉

無題／ノート／母インタビュー

絵画作品は下書きの上に糸を貼り付けていく作風がユニークである。イメージしたものが紙面で表現されていく。また取材時にはもう一つの彼の表現であるドラムセッションの場面にも立ち会う機会に恵まれた。キーボードを演奏するインストラクターとのセッションは、変幻自在にリズムを変え圧巻だった。母親にも話を聴くことができた。幼少の頃より太鼓を叩いたり、リズムをとることが大好きだった。ゲームセンターの太鼓の達人を極めたり、家の中の様々なものを使ってリズムをとっていた。UNICO と出会い、講師との初めてのセッションでは部屋中のあらゆるものを叩きリズムを刻んだ。その時のスッキリした表情が印象的だったという。UNICO において自分を表現することの楽しみを感じ、またセッションを通じ相手を意識したやりとりも身についてきたという。現在 UNICO では月に絵画制作とドラムのセッションを楽しんでいる。以前、モット・ザ・フープルという70年代に活躍したロックバンドのキーボーディストのモーガンフィッシャー氏とセッションする機会があった。本人もそのセッションをととても楽しみ、またモーガン氏からも『彼にはバンドが必要だ』という言葉ももらうなど、刺激的なセッションだったという。作品展当日も本人、インストラクターと訪れ、会場にあったグランドピアノとドラムで即興演奏が行われた。



金井 眞紀子（1993 年生まれ）埼玉
花

施設に来た当初は視覚に障害をもつことから強い不安や、他者からの関わりや支援に対しての抵抗が強く、衣服を着ることができなかったり、居室から出ることも難しい状況だった。年月を重ね支援員との関係も良好になり、安心感が持てる環境が整っていき活動にも参加できるようになった。それに伴い支援者も彼女の「好きなこと」に注目するようになった。紙をちぎったり、丸めて投げるということを長くやっている様子が見られた。普段は見過ぎていたがそれが彼女にとって楽しい時間ではないかと考え制作のきっかけになった。今では皆と一緒に活動に参加することや、洋服を着てお出かけを楽しむ様子がみられ、また作品づくりを通じて自分を表現するものを手に入れようとしているように思える。「タネ」に気づいたことで、どんな芽が出て、木になり、実をつけるのか関わっていきたい。（職員）



井上和彦
お祈り・インタビュー

インタビュアー 小泉さん（支援員）
小泉：お祈りは、いつ頃からやっていますか？
井上：あれ～あたし～3 1 くらいだね。それまでもちょっとはやったことあるけど、興味なかった。
小泉：お祈りは体を使うじゃないですか？ 疲れませんか？ それでも毎日続けるのですか？
井上：疲れますね、体全体が。続けるのはルールですからね。続けないと、怒られちゃうからね、神様に。罰が当たる。
小泉：1 日何回？ 何時頃やっている？
井上：時間はわからないんだけど、午前と午後、最近。昔、1 回の時があったけど、瀬戸さん（職員）が泊まりに来た時は2 回だったね。もとは、なんだっけな。え～と、このお祈りね、このお祈り、このお祈り、、、実は、よろず相談、よろず相談、どんな事でも真面目な事なら良いって言うけどさ。もとはね、もとはね、えっと、お母さんが長生きしてくれるようにって思ったんだけど、お母さん亡くなってからは、今は今は、誰が長生きしてもらいたいかわかってます？
小泉：誰でしょう？ ？ ？ 田川寿美さん、ですか？ ！
井上：正解！ まして、最近はコロナ！ 特に！ 特に！ 田川寿美さんをコロナから守るが為にね！ 職員でも利用者でも総合にやってますけど、私がお祈りしてあげてるね。お祈りしてあげてる、相手には言ったけど、そういうもの、、、お～なんて言うの、癒しね、癒し、、癒しがあれば、全部芽づる式にいくから。小泉さんでも、昭江さんでも、美香ちゃんでも、そういう人が、あれだよ、リフレッシュというかりラックスというか、イイ気持ちになってね、、、イイ気持ちになって、、イイ気持ちになったって事は、それは田川（寿美）さんにも届いてるって事なんだよ！ 田川さんにも届いてる。
小泉：ありがとうございました今日は。またお祈りを頑張ってください。
井上：まあ、一生死ぬまで頑張る予定ですけどね、一生死ぬまで頑張る予定ですけど、、、



山下龍一（2000 年生まれ） 神奈川
ファッション

事業所では太鼓をたたいたり、体操を披露したり、絵を描いたり、またトイレ掃除に精を出すなど、ありあまるエネルギーを表現し、それを人に見てもらうことに心地良さを感じているようである。
母親や女性への憧れがあるようでエプロンやスカート、バッグが好きである。そこから可愛い物を選び身に付けた姿をいつも鏡でチェックしている。
頻繁にはいているグレーのチェックのスカートは、大好きな「あずきお姉さん。（体操のお姉さん）」を連想している。お洒落は彼の大切な自己表現と思われる。本人がいると職員まで楽しくなります。と多くの職員が口にし、彼の表現を共に楽しんでいる。



鈴木 尚 神奈川
尚の会話

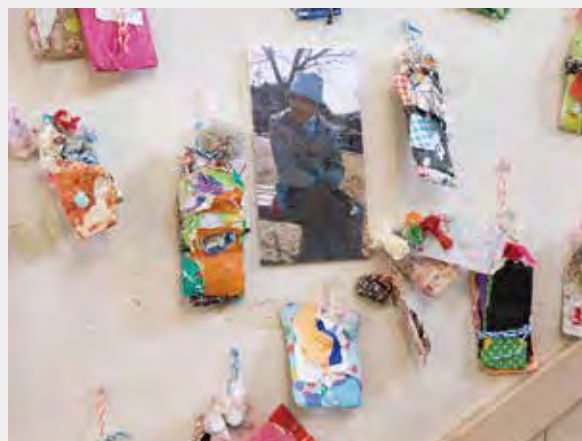
鈴木尚さんは毎日ささやかな「発明」をしている。「歌い屋（人間ジュースボックス）」という看板を勝手に作って勝手に施設の入り口において地面に座り込んでみたり…
ありそうでなさそうなオリジナルことわざ集を作ったり…
替え歌やオリジナルソングを作っては披露してみたり…
シュールな四コマ漫画を描いたり…
ありえない食べ物の組み合わせで料理をしたり…
風来坊なマルチタレントである。



堀口 孝一（1934 年生まれ） 埼玉 お守り

若い頃は旅行に出かけた先々で「お守り」を購入するのが趣味だったが、高齢になり旅行の機会も減ってしまったため、「それならば自分で『お守り』を作ろう」と思い制作をはじめた堀口さん。昔から縄を編むことが得意で、身近な包装紙やビニールひも等を使って器用に作り上げていく。当初周囲からは、ごみを集めて何かを作っていると思われ捨てられてしまうこともあったため、他人に見られないよう袋に詰め込んでしまっていた。しかし徐々に周囲からの関心や理解が進み、本人も心おきなく製作できるようになり、支援員に見せたり展示用に貸してくれるようになった。

お守りは季節やイベントによって装飾を変え、常に腰に数個のお守りをぶら下げている。新しいお守りができるととても満足な表情を見せている。



金澤 一摩 埼玉 おばけのゴストント 舞台セット

『自分の人形で劇をやるのが夢なんです。』そう語る金澤君と出会い1年後おばけのゴストントという人形劇を実現した。人形はじめシナリオ、チラシ、ステージセット、小物、BGM からすべて一人で作り、当日は友人と2人で熱演。劇終了後、会場から大きな拍手をもらい、先生や家族、駆けつけた友人と肩をたたき合いながら成功を喜び合っていた。幼少時に見たトイストーリーの個性豊かなキャラクターたちに惹かれ、市販のおもちゃでは物足りなくなりティッシュやセロテープで人形を作り始めた。小学校の頃にピノキオに興味を持ち『人形に命が宿ること』を信じて丁寧に作ってみたものの、動くことはなく命は宿らないと感じた。テレビで見たひょっこりひょうたん島の人形を、見よう見まねで割りばしや段ボール・布などをつかい制作。試行錯誤を重ね材料も工夫し、より実物に近いものにしていく。同時に制作者たちにも興味がわき、近くに一座が公演に来たときには実際の人形をみて、さらに学んだという。中学生の頃から自分の人形劇をやりたい気持ちが強くなり、シナリオを先生に見てもらったり、学校のイメージキャラクターを使ったストップモーションアニメを作った。高等部では美術クラブに入り、人形作りを後押ししてくれる先生と出会って創作は加速していき、高3で校内で発表を行った。



大森 敏之（1964 年生まれ） 埼玉 ピアノ演奏（動画）

部屋に置いてあるピアノを見ると積極的に弾くという。でたらめに弾いているように聴こえるが、実は同じ鍵盤を繰り返し弾いていたりするが、それらが徐々にメロディにも聞こえてくる。

もしかしたら本人の中では何かの歌を演奏しているのかもしれないし、単にピアノの音が心地よいのかもしれない。なにか他の楽器や歌とのセッションなども試してみることが楽しそうだった。

展示会場でもピアノを見るなり蓋をあけ、音を奏でていた。



飯野 美穂 埼玉 秩父への想い～エッセイ

普段はお休み等を使いスケッチブックに自分の気持ちや日々の出来事、季節行事のことなどを綴っている。両親の故郷が秩父地域ということもあり、特に秩父地方への関心が深く、それにまつわる記述も多くみられる。文章の中には“秩父音頭”について書かれている箇所もあった。聞いてみると本人が実は歌うこと、踊ることをやってみたいという気持ちがあることに気づいた。本企画において秩父音頭をみんなの前で踊ることを目標にし練習を行っていくうちに、利用者と支援者という関係だけでなく秩父音頭を共に楽しむ間柄になっていく様も見られた。また発表にあわせていろいろな人が、それぞれの表現方法で秩父音頭に参加しはじめた。その元となったエッセイ作品である。



関口 エイ子（1952 年生まれ）埼玉 シャツさん

エイ子さん曰く、職員の服には『シャツさん』というモノが棲んでいるように見え、それに向かって毎日挨拶をする。ある日職員が、その『シャツさん』を絵に描いてみてとリクエストしたところ、様々な表情のユニークなシャツさんが描かれた。それらはそれぞれ名前を持ち、人によっては数匹もいるとのこと。「お化け、妖怪、鬼、ツチノコ、赤ちゃん、オムツ、おもちゃ、手」などどこか不思議なもの、怖いものに興味があり、それらも絵のモチーフになる。小林亜星に憧れ頭髪を4ミリにしているとのことだが本当は「瀬戸内寂聴さん」に近づく日を夢見ているなど、エイ子さん本人のキャラクターもとても魅力的であり、また支援者との会話ややりとりもとても温かく楽しい雰囲気だった。

（感想）

エイさんにしか見えなかった『シャツさん』は職員の一言によって絵になることで、みんなに見える“実在”するものになったといえるのではないだろうか。『シャツさん』を通じて表現の広がりだけでなく日々の会話や話題も豊かになっているように思えた。ちょっとした一言で表現のタネが見つかるきっかけになることを感じさせられた。しかし秩父の山中にはエイさんの好きな妖怪が本当に棲んでいるのかもしれない。



雨宮 正寿 山梨

木琴／衝動／はじける／星／モミの木

音を鳴らすことが好きで職員と手遊びや感覚遊びをして過ごしている。

普段はお気に入りのタオルを顔に当てたりしていますが、アート活動の時は紙やセロハンを顔に当てて遊びながら職員と一緒に作品を作っている。

職員曰く『遊ぶ』が本人と一緒にすごすときのキーワード。



依田 圭司 山梨 風を感じる

段ボールでつくる、カラフルで立体的なモビールたちの制作方法はユニークである。

依田さんは手が汚れることが苦手なため、段ボールのパーツは他の利用者が塗り、組み立ては支援員に指示ををする「現場監督」のような立場である。

制作した作品はアトリエスペースの天井から吊り下げられている。

福祉事業所でのアート活動において、他者や職員が手伝ったりすることが、作品の評価を下げてしまうのでは？という声も少なからず聞かれる。しかし周りを見渡せば世の中の作品には分業や作者指示のもと制作されているものもたくさんあることに気がつく。

担当の職員曰く、「本人と日々の丁寧な関わりをととても大切にしており、それらを経てカラフルなモビールが出来上がっていく。」これから福祉現場でのアート活動において大きなヒントにもなる作品ではないだろうか。



展示では出展者ごとに紹介パネルを用意し、パソコンで取材動画も流した。



紹介パネルは「タネ袋」をイメージしてデザインした。



イベント実施報告

アートセッション in 横瀬 関連企画「おどりに生きる」

開催日程：2020 年 11 月 22 日（日）

開催時間：10 時～ 16 時

開催場所：埼玉県秩父郡横瀬町 AREA 898、寺坂棚田、芦ヶ久保道の駅、あしがくぼ笑楽校（校庭）



●イベント概要

障害のある飯野美穂さんの表現の発表。

飯野さんとともに地域のローカルアーティストと埼玉県発祥の秩父音頭を町の様々な場所へ届けに行く。

●目的

コロナ禍により中止された地域の祭りを残念に思う住人に対し地域芸能を届けに行くことにより、人と人のつながりを再生する。

●結果として生み出したインパクト

埼玉県民の共通ミームである秩父音頭を媒体にして、障害のある人や芸術活動について触れてもらう機会を創出した。
表現活動に興味のある地域住民の可視化につながり、今後の活動の協力者をえた。

●対象者

アートセッション in 横瀬展示観覧者、秩父音頭を懐かしむ町の住人

AREA 898
踊り後にアンコールをいただく
イベント中



「おどりに生きる」

飯野美穂さんの秩父音頭への想い

報告：小林みゆき（社会福祉法人昴／まちこうば GROOVIN'）

●飯野さんとの出会い、秩父音頭を踊るきっかけ

飯野さんは週に一回利用事業所のアトリエに通い絵を描いたり、いろいろなことをエッセイにしています。エッセイには両親の実家がある秩父地域の暮らしのことが綴られています。その中に秩父音頭・秩父祭りのことも綴られており、それがきっかけになり、私は彼女と一緒に秩父音頭を唄ったり踊りや囃子を教えてもらう仲になっていきました。職員は、「飯野さんがあんなに歌や踊りを楽しそうにやる様子を見たことがなかった」と言います。

ある日、事業所の音楽活動の日に飯野さんの音頭のもと職員や施設利用者みんなで秩父音頭を踊りました。その次週のこと彼女のエッセイにはこう書かれていました。「私は、秩父音頭を“きちんと”踊りたいです。でも、ウィズ（施設名）のみんなには“自由”に踊ってもらいたいです。」

表現文化活動は、造形、言語、音楽、身体などの大きく分けて4つの表現媒体があり表現活動はそれぞれの媒体を横断しながら昇華されていきます。飯野さんは縦横無尽に4つの媒体を横断されながら表現されていると感じました。踊ることによって見るもの、聴くもの、書くものそれぞれが共鳴し、彼女の表現は変化し始めました。



記録写真：踊りをきっかけに
人と人の役割が入れ替わる

デイセンターウィズ
職員に音頭を踊り伝える飯野さん
イベント前

●想いが踊り場になる

そしていよいよ飯野さんの秩父音頭に対する想いの根幹に触れる日がやってきました。飯野さんを訪ね秩父音頭発祥の皆野町からダンサーがアトリエにきました。3人で秩父音頭を踊り終えたとき、飯野さんは呟きました。「おどることでありがとう、って伝えたいんです。」大変大きな含みを持つ言葉に踊り手である3人の心が一気に燃え上がったのを記憶しています。

アートセッション in 横瀬で発表する【踊りを届ける】

コロナ禍で人の移動や集うことが難しい状況の中、『来てもらうわけでもなく、出向くわけでもないが、どこからともなく聞こえてくる秩父音頭の唄や踊りをとどけ地域の人たちの心に灯をともせるような我ら流のお祭りを作る』方法を話し合いました。アートセッション in 横瀬の関連イベントとし横瀬町の様々な場所を巡り、町の公共スペースの駐車場や棚田や道の駅などで踊ることを計画しました。

出会いの連鎖

飯野さんの「ありがとうを届ける」場は午前は公共施設のAREA 898前と寺坂棚田。午後は、あしがくぼ道の駅売店前とあしがくぼ笑楽校の校庭の4か所になりました。

最初のAREA898でのパフォーマンスは、いつも以上にノリノリで素敵な裏声を披露し、観客からもアンコールの声や握手を求められた快く応じていました。

AREA 898での動画

<https://www.youtube.com/watch?v=JXJYkFOO7Y4>

2か所目は町の名所のひとつ寺坂棚田です。地元の民舞愛好家で秩父音頭も伝承される人たちが踊りを見ており、「若い人らが練習しているのなら、練習テープを貸してあげたい！」という温かい応援ももらいました。

寺坂棚田での動画

<https://www.youtube.com/watch?v=bx1eKnIUXKk>

午後は、あしがくぼ道の駅からスタート。踊りの輪も次第に大きくなり、動画で撮影される人や手を叩いて参加する人もいました。また飯野さんのご家族、親戚も来ていました。大勢の前での堂々とした歌や踊りを見て母親は「家では一切踊らないのにね」とのこと。本人は「恥ずかしいから～」だそうです。かくして、午後のパフォーマンスも滑りだし好調となりました。

あしがくぼ駅道の駅での動画

<https://www.youtube.com/watch?v=RVi2hXLAq2Q>

ファイナルステージはあしがくぼ笑楽校の校庭。この地域は祭り好きの血が騒ぐのか、演奏が始まるとゾロゾロと人が加わり始め、輪は次第に大きくなり、近所のお婆さんや子どもたちも参加しました。4カ所を歌い、踊りきった飯野さんに感想を何うと「いろいろな場所に（秩父音頭を介して）行けたこと、このような機会を与えてもらったことに感謝したい。」と話していました。

あしがくぼ笑楽校の校庭での動画

<https://www.youtube.com/watch?v=gMOpmE8GrpY>

彼女を筆頭に様々な場に出向いた先には、無数の出会いの連鎖が生まれました。アトリエで演奏をしていた時よりも多くの人たちに出会い、老若男女幅広い人々の心を踊らせていたように感じました。こうして、秩父音頭を歌い踊ることで「ありがとうを届ける日」は終わりました。

●飯野さんを囲む踊り場の可能性

身体表現は、社会背景や各時代の美意識、教育等の影響を受けその形は変化します。現在の秩父音頭は『止め』と『形の美』を意識した踊り方が主流ですが、飯野さんからは『流れ』と『躍動感』が感じ取れます。そこには彼女が見聞き、経験した記憶が踊りとなって現れているように思います。同様に一緒に踊った地域の人たちからもそれを感じました。
みんなで踊った秩父音頭は飯野さんが言っていた「きちんとと自由」な踊り方だったと思われます。

●「想い」のこれから

後日、当日の様子の動画をみんなで観ました。ある人からの「どうして飯野さんは踊ってるんかな～。」の言葉に飯野さんは、「踊らないとな。今の楽しい秩父を知ってもらいたいから。」と、答えていました。私たちは彼女から芸能の歴史や地域への想いを学びました。これから飯野さんは、一体どんな音頭をとり、人々の心を踊らせるのでしょうか。苦しい時代も穏やかな時代も埼玉県北部ならではの踊り場を飯野さんと創出していければと願っています。

参考資料：浅見清一郎、『秩父：祭りと民間信仰』有峰書店、昭和50年

出展者・ 周囲の人たちの声

アートセッションin横瀬～表現のタネたち～出展者・ 支援者、周囲の人たちの声を聞きました。

[回答者]

横山 太志朗・母（東京）

黒杭 大朗（千葉 生活さぼーとピース）

金澤 一摩（埼玉）

田中 郷+母（千葉）

鈴木 尚+支援員（地域活動センターひふみ 神奈川）

山下 龍一+支援員（生活介護事業所のびやか 神奈川）

ちひろ +支援員（イタル成城 東京）

清心会（井上、大森、関口、金井、堀口+職員）

飯野 美穂+母（埼玉）

①今秋の作品展に出展された感想

■日頃、誰に見せるわけでもなくただ黙々と制作をしている息子ですが、この様な機会を頂き、実際に自分の作品を初めて出会った方が見てくださり、感想などをお話くださるということは、本当に素晴らしい経験になったと思います。今後は今までとは違う新しい思いを込めて制作するのだらうと感じました。（横山・母）

■嬉しかった。他は特になし。（黒杭）

■他の地域に住んでいる方々にも私の作品を見ていただけたりしたのでとても嬉しく思っております。（金澤）

■素晴らしい機会をもうけてもらい感謝します。アーツ千代田という美術館と展示の仕方が似ていて楽しかったです（田中・千葉）

■発表する機会を与えて下さり有難うございます。（田中・母）

■今まで大きなイベントに、利用者さんを取り上げて頂くことがなかったので、多くの方に知ってもらう良い機会だったと思います。ご本人もご家族も快く引き受けてくれました。（山下）

■学校という、美術館やギャラリーとは違う場でどう見せるか、という点を考える面白がありました。（イタル成城）

■みなさんと一緒に踊ることができてよかったです。（飯野）

■本人のやりたいことができてよかった。発表の場があってよかった（飯野・母）

■利用者さんから「楽しかったです。嬉しかったです。」（清心会）

■感無量です。（鈴木・神奈川）

■利用者 ご自分の作品を見て不思議そうな顔をしていましたが、作品を実際に見ることが出来て良かったと思います。（清心会）

■日常に取り組んでいる事が作品として出展されており、利用者さんだけでなく、保護者の方、支援者全員、その利用者さんに対する理解が増したと思いました。（清心会）

■日頃は「あれ？」と思っている事が、アートとして表現され、評価され、形として展示されて良かったです。（清心会）

②展示を見た感想

（自身だけでなく他の方の展示を見た感想）

■会場の雰囲気もととてもあたたかく、皆さんそれぞれの作品が生きる素敵な展示でした。（横山・母）

■作品をととても素敵に展示して下さり、自分の素晴らしさが一般の方々の目に触れたと思うと、とても嬉しかったです。自分の声や私たち支援員の声を皆さんの目に触れるようにして下さりありがとうございました。（黒杭）

■他の方の作品も目を引く物ばかりでとても興味を持ちました。特に小さくて細かい作品や、立体型の作品が面白かったです。（金澤）

■それぞれの方の作成した作品を見て、障がいを持っている方の作るものは自由でアールブリュットというジャンルに未来を感じました（田中）

■皆様の作品、表現は、いきいきとしていて感動しました。

■どの作家さんもクオリティが高く、支援する方がその方のどのあたりに面白さを見出しているのかがよくわかる展示で非常に興味深かったです。制作風景やご本人の映像があるのも良かったと思います。（イタル成城 東京）

■観てただけでありがたい。（鈴木）

■表現の幅広さや深さを感じました。（松尾）

■踊りの練習等の様子など DVD になり楽しく見ることができました。（飯野）

■展示による作者へのかかわり方が明るく楽しそう。支援の大切さとそれだけにやらない何か大切なものがあることを感じた。（昴）

■他の法人の展示のアイデアが見られて参考になりました。（清心会）

■ SNS の情報も展示されており、見せ方の幅の広さを感じました。（清心会）

■アートに特化せず、表現というくりでの展示に感銘を受けました。（清心会）

■アートと言うと、絵や作成した物のイメージが強くある中で、井上和彦さんや大森敏之さんのような動画を通

しての作品もアートとして表現をするという部分では新しい見せ方、表現の仕方があるんだなと感じた方が多くいました。素晴らしい！！と表現する中で笑いもあったりと今までと違い良かったと思いました。（清心会）

■個性的な作品やカラフルな作品の展示が多くてとても良かったです。（清心会）

■一人の利用者さんの描いた絵を何枚も展示してあるのも見ごたえがありました。（清心会）

■ボールペンで細かく描かれた作品について、自分は、ボールペンでの作品を描いたことがないので、難しそうだったと思った。（清心会利用者）

■「シャツさん」の絵が良かった。（清心会）

■個性が生かされた作品が多かったと思います。（清心会）

■音を感じ、風を感じ五感で表現された展示でした。（清心会）

■ DVD など活用されていて、日ごろの様子もわかって良かったです。（清心会）

■どこに誰の作品があるのか会場案内図があったら良かったと思います。（清心会）

③会場についての感想

■私共の住まいからは遠く、本当なら親族揃って伺いたいところでした。それが叶わず残念ではありましたが、あの場所でなければ出せないとても開放感のある本当に素敵な会場でした。（横山・母）

■廃校を利用した事で出展された方も見に来て下さった方も、どこか懐かしく広々とした空間で落ち着いた気持ちで見られたのではないのでしょうか。私たちの四街道市からはどうしても遠く、自分の目で見られなかった事は残念でした。（黒杭）

■他の地域に住んでいる方々にも私の作品を見ていただけたりしたのでとても嬉しく思っております。

■来たところがない所でしたが、何処か懐かしい感じがしてとても良かったです。（金澤）

■もともと学校だったところを展示会場にしたのは面白かった。どこまでが居抜きか考えました（田中）

■ノスタルジックな雰囲気が良かったです。

■学校という場の面白みは大変感じる事ができました。白い壁の美術館やギャラリーとは違った、作品との親しみやすさ、近い距離感が出たのではないかと思います。（イタル成城）

■元小学校という場所の記憶がずっと身体のなかに入ってくるようで、いだけで楽しかったです。各教室の広さや特徴に合った展示の仕方に感動しました。（松尾）

■建物がよく崩れないな。（鈴木）

■場の雰囲気やスペースを上手に使っており、楽しく観る事が出来ました。（清心会）

■外でのイベントもあり、音楽も楽しかったです。（清心会）

■古い小学校を使って作品を展示することで、作品がとても良く見えました。（清心会）

■ピアノやキーボード等を使って展示してある作品も良かったです。（清心会）

■雰囲気が良い反面、段差・階段等車いすの利用者さんが見学できず残念でした。（清心会）

■昔の小学校の懐かしい雰囲気やあたたかみがあって良かった。（清心会）

■身体障害者の方、視覚障害の方が今後どのように作品展を楽しむ事ができるのかも考えていけると良いと思いました。（清心会）

■滑りやすい場所で利用者さんはあたふたしていました。履物等も検討が必要か？（清心会）

④作品の制作や発表など、どのようなサポートがあればよいでしょうか。

■特に思いつくことはありません。今回の展示にもたくさんの方のアイデアを頂き、ご配慮くださり感謝しています。（横山・母）

■具体的な題材があると制作しやすいのではないのでしょうか。

■定期的に連絡や、情報があれば大丈夫です。（金澤）

■いろんな機会を設けて多種多様なサポートを期待します。参加者さんの講演なども見てみたいです。あしがくぼ笑学校で絵の下書きなどに塗り絵のコーナーなどもあればいいなと思いました（田中）

■今までの絵よりもパワーアップした制作をしたい。（鈴木）

■このような作品発表の機会を頂けると有り難いです。また絵、デザインなどを商品化に繋げらるといいなあと思っています。（田中・母）

■十分にサポートいただいていると思います。また、展示にあたって今回は当施設のスタッフを派遣させていただくことにも快諾していただき、こちら側の展示イメージなどを十分にお伝えすることができたかと思っています。（イタル成城）

■展示の際のノウハウや便利な展示グッズ、宣伝方法など、サポートして下さると助かります。（清心会）

■利用者が好きで行っている行動をアートとしてとらえることのアドバイス。（清心会）

■作品の展示方法等「見せ方」のアドバイス。（清心会）

⑤今後どんな発表の場があればよいでしょうか。

■我が子はまだ幼く本人の意思も定まらないので、インターネットでの発表には抵抗がありましたが、ご自身やご家族の希望が合えば、SNS や YouTube での制作現場の配信はきっと素敵な広がりにつながると思います。今回の様な展示会も是非また開催して頂きたいです。（横山・母）

■例えば本人の作品を利用して他の作品を作っていく等も素敵な作品になるかもしれません。

■広い空間でドーンと沢山の作品が置ける事と、他の皆さんが集まったり、人がよく集まる場がいいです。(金澤)

■敢えて受賞式なども作って、それぞれの参加者さんに賞状の授与式などもあったらいいかも (田中)

■出来る範囲で発表の場を設けて頂けると有り難いです。海外も有りかも？今はコロナで無理ですね。(田中・母)

■今回は秩父という場でしたので、今後も東京からさまざまな地域に出していければ、と思っています。

当施設の利用者さんの作品が、地域の枠を超えて広まれば、と思います。(イタル成城)

■外国人にも観てもらいたい。絵の達人、アーティストに観てもらいたい。(鈴木)

■秩父音頭の発祥の地「皆野町」でも踊ってみたいです(飯野)

■お茶でも飲みながら、小スペースでも楽しめるアート展があっても良いかと思います。(清心会)

■音楽やダンスの表現やアートも見られるイベントがあると楽しいと思いました。(清心会)

■コロナが落ち着いたら、ポスターや市報を使って、お客さんを沢山招待してアートを見てもらいたいです。(清心会)

■グッズ販売などもあると良いと思いました。(遠方からの出展された方もいたので、そこの施設さんのグッズなども見てみたいなと感じた。)(清心会)

⑥支援センターへの希望などありましたらお聞かせください。

■これからも、自分の知らない法人や事業所をもっと知りたいです。(黒杭)

■私たち事業所では焼き菓子を作っておりますので、販売と展示を同時に出来ると嬉しいです。(黒杭)

■特にありません。(金澤)

■また展示の機会など頂けたら嬉しいです (田中)

■今後もぜひ面白い企画と共同でできればと思います。(イタル成城)

■埼玉でも地区ごと、エリアごとで日常的に取り組んでいる姿を見てもらえる機会があると良いと思います。(清心会)

■アート活動で色々な施設の皆様とコラボできる機会を提供してもらえると良いと思いました。(清心会)

■特にありません。(横山・母)

⑦その他、意見、今後の抱負などをお聞かせください。

■または是非なにかの機会にお声がけいただけたら嬉しいです！皆さまのご発展をお祈りしています！

■今回この様な機会をいただいたことで、私たちが本人を見つめる良い機会となりました。今後も、利用者の日常の中で行われているアートに気づく目を大切にしていきたいと思いました。この度は本当にありがとうございました。

■みんなが喜んで 楽しめる作品作りをこれからも続けて行きます。

■とにかく作品を描く、公募に出展したい、様々な形態のアート活動をしたい。(田中)

■私事ですが、4月より地元の生活訓練施設(精神障害者)に勤務予定です、何名かアーティストがいらっしゃいます。今後ご相談に乗って頂きたいと思っていますので宜しくお願い致します。(田中・母)

■コロナ渦の影響もあり、今回は作品展を見に行くことが出来ませんでしたので、またこのような機会がありましたら、見学させて頂きたいと思います。アート活動の取り組みや地域の方々との繋がり等、興味深いところが多くあります。(山下)

■今回の秩父は、個々の作品のクオリティも高く、全体としてとても面白い企画になっていたと思います。また、廃校を利用するということで、訪れること自体でのわくわく感がありました。(イタル成城)

■今回のアート展をきっかけに、表現活動に対する見方が変わりました。利用者さんの新たな可能性を見出すきっかけにもなりました。日々の支援の中で新たな発見や見る目を養っていききたいと思います。(清心会)

■企画全体を通して、今回のテーマである「表現のたね」という表現に感銘を受けました。表現活動はまさしく活動であり、過程であり、成長していくものだと思認識しました。できた作品だけを評価するのではなく、その行為自体が、その将来が、その人の、周りの人の幸せを作っていくのだという、当たり前のことを今回、認識させられました。(清心会)

■秩父音頭をテーマとしたイベントがあり、秩父っ子ならだれでも踊れる秩父音頭ですが、地元秩父からでなく他地域からの発信という事で、一風変わった秩父音頭のとらえ方に新鮮さを覚えました。合わせて生活の1部になっている秩父音頭の存在も再確認した1日でした。今までにない、面白い企画だったと思いました。(清心会)

■中々、アートに携われる方が少ないのが現状ですが、今回の表現を通して見せ方一つでアートになってしまうことを学べたので、次回に生かしたいです。(清心会)

来場者の声

■壁にプロジェクターで動画を流す展示がユニークだった。

■校舎の雰囲気にあわせた展示がよかった。

■校舎の雰囲気がとてもいい。こういった場所が残っているのはうらやましい。

■懐かしい雰囲気に浸れた。たまたまツーリングで来てみる事ができた。

■道の駅でイベントを知って偶然寄った。見たこともない作品やパフォーマンスばかりで驚いた。

■障害のある人たちの日常を面白がっているような感じを受けた。

■日常の行為をアートという表現に結びつけることは、どういう意味をもつか…。

■作者の方とお話しできてよかった。(金澤君 たくさん説明していました。)

■作者の方が喜んでいる様子がよかった

■自然が豊かな場所で、このようなアート作品が観ることができてよかった。

■秩父音頭の踊りの中で地元の高齢の方が輪に入っているのがよかった。

■コロナでイベントが少ない中でこうしたイベントがあって元気が出る。

■絵画だけでなくパフォーマンスなどがあるのがよかった。

■自分の勤める施設にも今回展示されたような表現をしている人がいることに気がついた。今後は視点を変えて見てみようと思った。

■福祉施設関係者内に届く展示？



■おもりの数がスゴイ。また等身大パネルの展示のアイデアはユニーク。

■お祈り (井上さん) に、なにか言いようもないパワーを感じた。

■手帳の作品の細かさにびっくりした。何を描いているのか見入ってしまった。また何故それをわざわざ虫眼鏡を使ってまで小さな文字で描くのか、すごく興味がある。

■自分の作品も展示してみたくなった(障害のある人本人)。

■鈴木ひさしさんの動画がシュール。

■下着の絵、パンツの絵が干してあるのは何故だろう？

■酒井さんの絵がとてもかわいい 文字もユニーク。

■何気ないことにも視点を変えると魅力のある見え方がした。

■ダンスや音楽などのパフォーマンスを自分たちの施設で取り入れてみたい。山下さんの活き活きとした表情が印象的(太鼓やダンスの動画を見て)音楽活動は必要。

■戦車の絵の細かさがスゴイ。また7歳という年齢でこの世界観はヤバイ。

■金井さんの作品、色々とかかわりの中で工夫をされていることが分かった。

■関口エイコさんのおばけの絵の世界観は面白い。作品の説明をうけてさらに面白く見られた。本人は“見える人？”なのでしょうか(笑)。

■堀畑さんのお母さんのインタビュー動画がとてもよかった。

■おかあさんのインタビュー動画をみて、たくさんのお悩みをもちながらも本人の得意なことを活かすためにあきらめずにやってこられたことはすごく励みになった。

■ドラムや木琴を叩く動画で、本人の自信にあふれた表情がすごく印象的でした。

■作者さんが訪れ実際にドラムをたたいているところを見ることができてよかった。驚きました。

■秩父音頭と一緒に踊れてよかった。

■都内から来たが、すごくのんびりできた。校庭でもあそべてこどもも喜んだ。

アートセッション in 横瀬 ～表現のタネたち～ vol.2 座談会

11月に行われたアートセッション in 横瀬～表現のタネたち～の続編企画として実施。

座談会日時：2021（令和3）年2月3日土曜日

場 所：ほっこり堂

埼玉県比企郡ときがわ町大野 602

<座談会動画>

ART(s) さいほく youtube チャンネル

<https://www.youtube.com/watch?v=mzMYUETFeNA>

アートセッション in 横瀬の17名の出展者の中から5名の方を選出し、作者本人、支援者にさらに取材をし、その表現の魅力について深堀りを行った。制作をしている時の気持ちや夢、やってみたいことなどのインタビューと、彼らの表現やパフォーマンスを一本の動画に編集した。

後日、動画を福祉事業所関係者や人形作家とともに埼玉県ときがわ町の山奥の古民家ほっこり堂にて視聴し、「表現のタネたち」についての座談会を開催した。

その模様を撮影し、YOUTUBEに公開した。

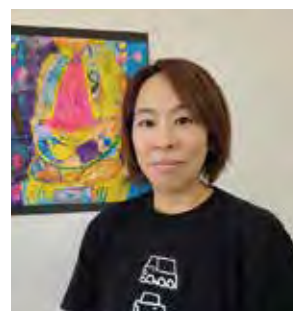


座談会参加者

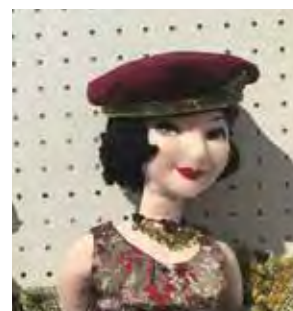
－ ゲスト －



新井 幸恵さん
社会福祉法人 清心会



荻原幸穂さん
社会福祉法人 清心会



naoko さん
人形作家

－ 司会・進行 －

石平裕一、小林みゆき
社会福祉法人 昴、ART(s) さいほく

<座談会内容>

導 入：企画説明、参加者紹介

本 編：追加取材動画、出展の動画を視聴

座談会：出展者とのエピソード紹介、座談会参加者とともに感想・気づきのシェア

金澤 一摩さん（埼玉）

金澤さんの夢は、「自分で作った人形で人形劇をやること」。

2020年2月にオリジナルストーリーの人形劇を上演し、夢を実現しました。



【取材動画 / 金澤さんへのインタビューより】

一人形作りのポイントは？

人形のギミックがうまく動くかどうか、みんなに「どんな感じで愛されるか」を考えて作っています。

一出展した人形劇の見所は？

お化けのゴストントが館の中で、上手く掃除できるかどうかが見所です。

一次の夢はなんですか？

みんなが驚くようなオリジナル人形劇を作りたいです。今年の抱負は、身体に気をつけて作品作りをすることです。

－今日の服装も自作なんですか？

パンツは一枚布から型紙をとって作りました。上着のジーンズ色のところは、母が使用していたジーンズを再利用したものです。

－最後に一言お願いします。

（コロナ下ですが）気を引き締めて、めげずにたたかって行きましょう。家でじっとしていてもアイデア出てこない時があります。そんな時は、家の中でも体を動かすと良いですよ。



【座談会でのお話】

naoko：（金澤さんの人形劇には）随所に工夫や小さい頃から人形を作っていた技術が見受けられます。人形を動かす時、関節が稼働するように動かすのは難しいですが、それができている。人形の動きに自然感があります、まだ19歳とのことで、今後が楽しみです。

（私も人形づくりをしています）これまで一切なかったものや未知への挑戦をしている時、一番血が湧き上がります。「あなたには絶対にできない」と言われれば言われるほど燃えます。それを打ち勝つてやるという気持ちとの闘い、それをやり切ったときにようやく生きている実感があります、彼も同じなのかもしれません。金澤さんは、オリジナルの劇・音楽で演じていますが、相当楽しくてワクワクしていると思います。

鈴木 尚さん（神奈川）

毎日ささやかな発明をしている鈴木さん。「歌い屋」「人間ジュークボックス」という看板を作り、施設の入り口に座り込んで、「オリジナルことわざ集」「替え歌」「オリジナルソング」などを披露しています。他にも、シュールな4コママンガを作ったり、ありえない食べ物の組み合わせで組み合わせ料理をしたりなど、風来坊なマルチタレントさんです。



【取材動画 / 鈴木さんへのインタビューより】

—どんな時にアイデアが浮かびますか？

いつも直感です。直ぐにメモできるように書くものを側においています。歌はパソコンを使って録音します。

—ミュージックビデオの完成品を見てどう思いましたか？
自分でも凄いと思いました。アニメーターに見てもらいたいです。

—これからの夢は？

まず、絵のレベルアップをしたいです。そして、動画を作ったので、次は声優をやりたいです。小さい時に声優になろうかと思っていました。銀河万丈さんのような怖い声をやりたいです。

—動画を観た方へ一言お願いします。

（コロナ下ですが）どんな時でも、冷静沈着でいれば何事にも向かっていけますよ。



施設スタッフより

鈴木尚さんの絵には物語性があり、その中に入ってみるととても面白いです。お芝居も作れると思って来ましたが、ストーリーを受け取って動きにしてみるとか。尚さんと一緒にやれることはどんどん広がって行きます。オリジナルで独特な世界、声の質、演じる声色、もっとどんどんブラッシュアップしていったら面白いと思います。



【座談会でのお話】

新井：鈴木さんの動画を観て、笑って、元気をもらいました、「心を解き放て」と言われている感じがします。何にも縛られない発想で、頭の中でどんなことが渦巻いているのか、きっと楽しいだろうなと思います。

荻原：みんな鈴木さんに釘付けで、本当に会いたいと思います。作品1つ1つが「亀でテニスをする絵」とか、シュールだけど楽しませてくれるのは鈴木さんの力ですね。

依田 圭司さん（山梨）

カラフルな段ボールを用いてモビール（吊るすタイプのインテリア・アート）を作った依田さん。最初は手が汚れることが嫌で、依田さんはイメージを伝え、職員や他者がパーツのカットや彩色を担当していました。



【取材動画 / 依田さんの担当スタッフへのインタビューより】

できたパーツの中から作品に使うものをセレクト。職員の手本を見て、上手に切り込みを入れて組み立てます。接着作業は他の人が行います。依田さんの感性・イメージに合うようにひとつ一つを確認します。

作品を見たいいろんな人から「凄いね」「素敵」「カッコイイ」の声を聴き、以前より自信を持って、楽しそうに作品作りをされるようになりました。今では、少しくらい手が汚れることにも慣れて来たそうです。



「上手い」と声掛けをするのではなく、「〇〇さんらしい色になりましたね」「この形は面白いですね」等の声掛けすることを心がけています。そのような声掛けをする事で、前よりは活動に参加してくれているように感じます。作品から、利用者さんの伝えたい事や、その日の感情が出てきており、何となくですが、利用者さんの声以外の伝えたいことが分かったような気がしました。作品は、事業所の廊下や階段などに展示する事で、活動に入らない職員や来客された方に見てもらい、その利用者様に声を掛けて頂くことで、自信に繋がっているように感じます。

【座談会でのお話】

新井：作品の完成までには、長い年月がかかったことが想像できます。作品だけでなく、それに至るまでのところに着目した、それを象徴する動画でした。同様の経験をしたことがあるので、それを思うと思わず涙が出て来てしまいます。

荻原：依田さんは、「手が汚れるので自分でしなくても良い」となっていたけど、職員の「なんとか形にしたい、発表したい、見てもらいたい」という思いによって、少しくらいの汚れも気にならなくなりました。作品を見てもらうことは、作者にとって嬉しいことで、次の制作意欲に繋がります。汚れが苦手だったのに、少し頑張れるようになったことなど、普段の生活では越えられないものも、アート制作では越えることができます。やってみないとわからない、一緒にいるスタッフも楽しくワクワクして来て、「次は何やろう」ってなるのが、アートの楽しさです。

naoko：皆が元々、表現したい気持ちを持っています。それを引き出してあげること、そのために対話をする、寄り添ってあげることが優しさです。アートはコミュニケーションツール。本人のペースを大切にすることで、安心感が生まれ、そこからいろんなものを生み出せます。心が通じ合えた時に、嬉しくなりますね。



ちひろさん（東京）

ちひろさんは可愛いものが大好きで、それを絵に描いています。制作中にちひろさんにカメラを向けると、「ニコっ」と言って笑顔を見せてくれます。モチーフはたくさんあって「神様・女の子・うさぎ・下着」などです。どれもちひろさんの好きなものだと思います。



【取材動画 / ちひろさんの担当スタッフへのインタビューより】

ちひろさんは、制作している姿そのものが面白いです。使う色・塗り方・空間の使い方、それぞれにこだわりが凄くて、それが随所に現れています。自宅では本物の下着に、お絵描きしたりしているそうです。なんで下着が好きなのか、意味は無いのかもしれないですし、好きに理由はいらないのでしょうか。「好きの情熱」がちひろさんの表現になって出てきてくれて、それを見た人たちが「可愛い、面白い」と心が動く。そのエネルギーが素晴らしいですね。

ちひろさんは1語2語くらいの発語のことが多いですが、アートを通してだとそれ以外のこともわかり、コミュニケーションができる、そこが魅力です。福祉施設でアート活動をする、支援する人が近くにいることが多いですが、ちひろさんは一人で自由に描いています。彼女の描きたいテーマが明確にあって、オリジナルな自分自身の世界をなんの制限もなく表現していることに面白さを感じます。1番面白いのは、施設の活動時間にとらわれず、休み時間など描きたい時に描くこと。アーティストとして湧いてくるものがあるので、描きたい時に描くことが大事だと思います。学校の授業ではないので、決められた時間に描く必要はありません。



一利用者の展示活動についてお聞かせください。
展示活動は、作品を表に出すだけでなく、アート体験自体が外の社会とつながることになります。アートは言葉とは違って、エネルギーが出しやすいので、人と関わる機会になって、支援の一環だけでなく、社会に働きかける、豊かになるヒント・助けになるかと思います。

一展示後、ちひろさんに変化はありましたか？
横瀬のアート展はコロナ下のため、現地に行くことはできませんでしたが、以前参加した「表と現アーツプロジェクト」では会場にも行って現地で反応を知ることもしました。その時の写真を見せて「楽しかった？」って聞いたら「嬉しかった」とわざわざ違う言葉で言い換えて伝えてくれました。普段1語2語で発語が少ないのに、そのように伝えてくれたことは新しい発見でした。



【座談会でのお話】

新井：スタッフの愛情たっぷりの動画で、ちひろさんや利用者さんを見守っていることが感じられました。「好きに理由はいらない」という考えにとっても共感できました。普段支援していて「なんでこれを書くの？」と思うような時があります。「特に理由がない」と答えがあった時に「そうよねー」と、その人を受け止めていく、そこに愛があると思います。

萩原：職員として、作品に意味づけをしないとイケないと思うことがあります。でも、無理やり意味を持たせたり、納得しなくても良く、一緒にやって楽しめれば良いと思います。つつい「もっとよく見せてあげたい」とか、活動時間外や絵を描くところでないと言ってしまうがちですが、ちひろさんの動画では、壁に猫娘とかオムライスとか色々書いていました。否定をされない環境は、創作意欲をかきたてますし、利用者さんの笑顔に繋がります。私も以前、書く時間や場所を制限していたなと気づいて、胸が痛いです。現場に戻ったらダメって言わないようにしたいと思います。

naoko：「描きたい時、描きたいところに描く」それを職員が保証してあげられるかが勝負です。教育現場で、「絵はこう描く」と押し付けられることがあります。

チューリップの絵の背景について、緑の中だと埋没するので紺にしたのですが。「そんな絵はダメだ」と言ったのは生徒の方でした。生徒の方に固定観念がありますね、太陽は赤、空は青、木は茶色など。周りが感性を守ろうとしないのは良くないと思います。ちひろさんはノビノビとしています。作りたいものを作りたいように、好きに理由はいらないという感じで描いているのが、素晴らしいです。「下着の絵、それは…」って言われてしまいがちですが、それを認めてあげることが周りの力であり、勇気ですね。受け止める職員の度量が試されるところです。ちひろさんは、突き抜けていて、元気があることが良いですね。「ニコッ」を聴きに会いに行きたいです。そしてうさぎの模様のノートが欲しいですね。



田中 郷さん（千葉）

言葉やフレーズからイメージを広げて絵にし、facebook を発表のフィールドとしてほぼ毎日投稿している田中さん。投稿へのコメントやリアクションが日々のモチベーションとなり、制作活動の励みになっているとのこと。



【取材動画 / 田中 郷さんへのインタビューより】

動画では、何もない状態から絵が完成する一連工程を、早送りで観ることができました。工程の動画の前には、田中さんのインタビューも収録されています。

一夢や抱負を教えてください。

絵がこの先どのようにしたら売れるのか、絵がお金になって世の中に認められたいです。その先の夢は、社会貢献です。

人は夢を持って自分の好きなことをやれば良いです。僕の好きなことは絵。得意なことで、夢が叶うように努力すれば良いです。「成功は1%のひらめきと99%の努力」という言葉の通り、夢を叶えるために必死になることは良いですね。

【座談会でのお話】

naoko：美術館などに出す場合、移動コストや運転手などが必要になりますが、ネットならば自宅で完結できるので便利ですね。レスポンスもすぐに来ますが、美術館だとそこに在席しないと反応は見れませんし、伝わりません。SNSだと即座に反応が来たり、コメントを残してもらうことができます。作品は作るだけでなく、観ていただく人がいてこそ完結します。そうしないと交流にならない。芸術の本質があるとしたら、自分一人で作るのではなく、いろんな人の感動の体験が価値に繋がります。

新井：通常、作品展は美術館やギャラリーという発想がありますが、今風なところでやっていることが凄いです。作品現物を観ることはできませんが、作品が届く数は凄く多くなります。現物だけだと身近な人にしか見てもらえませんが、遠くの人や多くの人たちの目に触れることで評価や価値も広がって行きます。広く知ってもらう機会を作る方法として、SNSなどの新たな方法が必要ですね。現物にこだわらないところが凄いですし、SNSで観たら実物を見に行きたくなります。



アートセッション表現のタネたち VOL2 座談会を振り返って ART(s) さいほく 石平裕一



「夢をかなえること」

今回の動画を作成するにあたり作者の夢について話を聞いた。

『夢は自分の作った人形で人形劇をやることです。』

テレビ番組に出たい、もっとみんなに元気になるような劇を見せたい』

『小さい頃から声優になりたかった。、ラーメンマンのような声に憧れている』

『絵が売れたら社会貢献をしたい。』

と夢の内容は具体的ではっきりしていた。

しかしインタビュー時の自分が発する言葉は『いいですね～、それは面白いですね～』だった。動画編集の作業を通して何度も彼らの夢

の話を聞いた。

と同時に自分の声も聴く羽目になった。『いいですね～、面白いですね～』の答えのその先はどうするのか？

今回の彼らの夢の話を“いいですね”で終わらせないためにも、あらためて、それをかなえるためのアイデア、資源、協力者の開拓に取り組むことが支援センターの大きな役割だと思った。そしてこの夢が実現不可能ではないと思える大きな理由は、彼らといっしょに活動する身近な人たちの存在があり、本人が何度でもトライできる関係性があることを、この取材を通じて感じたからである。



障害者芸術文化活動 普及支援事業研修会 「コアチョコ流 Tシャツのつくり方」

コロナ下のため、入場者数制限や座席の間引き、事前の検温など各種感染対策をした上で研修会を実施。埼玉県川越市の会場の他、Instagramによるライブ配信も実施しオンライン参加受付をした。

<日時> 2020（令和2）年10月3日 土曜日 14：00～17：00

<場所> アトレ川越 7階スペースセブン
（埼玉県川越市脇田町105）

<参加人数> 37人

<研修会内容>

第1部：3つの福祉事業所による事例報告

「talk about my Tシャツ（私たちのTシャツ語ります!!）」

第2部：Tシャツブランド代表によるトークライブ

「コアチョコ流 Tシャツのつくり方」



第1部：事例報告

talk about my Tシャツ 私たちのTシャツ語ります!!



橘田 一貴さん

社会福祉法人三富福祉会

サポートセンターハロハロー番館

山梨県 ※ Zoom で参加

■施設や活動について

三富福祉会の理念は、「障害のある人たちがその人らしく快適に、社会で自己実現しながら生活を送ることを支援する」ことです。日中活動支援部では、職員・利用者相互の共生共働を意識し、社会での役割（シェア）居場所を創造していくことを指針としています。楽しみや喜びを利用者や職員だけではなく、様々な人たちとシェアをしていくために、ニーズやストレングスに合わせたプログラムを提供しています。

■Tシャツ作成について

これまで、和紙を使っの便箋・ハガキ・メモ帳の製作・販売などをして来ました。Tシャツも作りたかったのですが、わからないことが多かったので最初は外部の方と連携しています。ユニクロなどのブランドものを研究して購入層や売り方を考え、生地の種類と、ブランド感を出すためのオリジナル要素（腕の部分のワッペン）、多色展開（9種類）などにこだわりました。

■デザインに込めたメッセージ

Tシャツにした Hand の文字は、「手作業」と「have a nice day の意味」です。Tシャツの絵を描いた方は挨拶をしっかりとる have a nice day という言葉にぴったりな方なので、作り手がわかる、メッセージ性のあるものになるように工夫しました。関係者には好評で完売しましたが、一般の人の購入は1割程度だったので手応えはあまりありませんでした。そして販路について、メモ帳（200円）などに比べてTシャツは3000円と割高なので、イベントなどに持って行きづらかったです。

■今後の課題

アートと売上の関係性です。働いてお金を得る喜びと好きな絵を描くことの関係性で、売れるためのデザインだと楽しめないし、だけど売れないと作業代が出せません。来年の夏に向けて、新Tシャツの製作も考えています。



中村 麻美 さん

特定非営利活動法人 あすなる会

地域活動支援センター むすび精神障害者地域作業所型

神奈川県

■施設について

地域活動支援センターひふみは精神障害のある方が日中通われる施設で、統合失調症か双極性障害、重うつ病の方が日中の居場所として利用しています。私どもの施設は就労訓練ではなく、調子が良いときに人と関わるような場所です。工賃ももらうことが目的では無いので、仕事は忘れて、自分たちの人生を生きなおす、「これからどうやって生きなおしたら良いのか」考えなおしていく場所でもあります。

■Tシャツを作るようになった経緯

Tシャツの絵は、鈴木さんという利用者さん作のもので、いつもテレビゲームをしています、日々色んな発明もしています。毎日常識にとらわれない発想で絵を大量生産しており、本人は描いたものに執着はないのですが、私たちから見たら宝物に見えます。鈴木さんは、絵やパフォーマンスだけでなく、生き方そのものがおもしろく、マルチなタレントだと思います。そのタレント性をどうやって発揮してもらったらいいのか考え、それが活かせるのがTシャツだと思い、作ることにしました。彼自身もTシャツを着て街中を歩いています。

■バンドTシャツも作成

PUSH という、利用者とスタッフ、事業所や作業所の枠を超えたバンドがあります。4つの作業所の頭文字を取ったもの（ペガサス・うらしま・せせらぎ・ひふみ）です。このバンド名を考えたのも鈴木さんで、曲の作詞も鈴木さんがしたものもあります。鈴木さんのタレント性をフィーチャーして外へ売り出すことに興味があり、『バンドTシャツを作ろう』と盛り上がり、バンドTシャツも製作しました。



■今後について

赤字を出さないようにイラストを業者に outsourced して作ったお試しなものです、今後はデザイナーさんを入れてカッコ良いものに仕上げることも考えています。



石野 正子 さん 眞塩 恵 さん

社会福祉法人 大三島育徳会

世田谷区立玉川福祉作業所

東京都

■施設について

昭和 55 年から世田谷区立区営の作業所第一号として開設し、その後平成 17 年からうちの法人が指定管理者として運営をしている知的障害の方の就労作業所です。現在 40 名のかたが在籍され、最高齢の方は 69 歳です。

■Tシャツが誕生まで

開設以来、知的障害のある人たちが作業療法という形で、刺子やビーズ刺繍、機織りTシャツ、干支の土鈴などを制作しておりました。販売は、高齢者の方がこちらへの配慮で買ったださったり、職員向けに割引販売したりといった状況でした。

■転機＝外部との協業

転機は外部とのパートナーシップです。私どもの刺し子が、地元にあるアパレルブランド『群言堂』さんの目にとり、利用者さんが自由に縫ったブローチ「チクチクブローチ」を製作して丸の内の KITTE の店舗などで販売し好評でした。同様にアパレルブランドの『JEAN NASSAUS』さんと一緒に刺繍のポケットTシャツを製作・販売、他ブランドの力を借りながらの展開ができました。とても良く売れましたが、まだ作業所としてはオリジナルのTシャツを作るという発想には至っていませんでした。

■オリジナルブランドの展開

刺子の針仕事をみんなができるようになってオリジナルブランドの立ち上げの機運が高まり、平成 29 年に irodori というブランドを作業所で作りました。ブランド名は機織りや刺子を中心とした色とりどりの作品と利用者の個性が様々で色とりどりだということを表し、右から読んでもいりどり左から読んでも irodori という覚えやすい名前にしました。その後、世田谷区の補助金事業を活用し、コンサルと一緒にブランディングを行い、自分たちのブランドでのTシャツ製作も始めました。自分たちの弱いところは、プロのコンサル・デザイナーに入ってもらって迷子にならないように、バランスを取っています。



■制作スタッフとの連携

デザイナーさんと組むときには、ブランドに合う人かどうかを大切にしています。組んだ方は、私がファンで顔見知りの方。相手が障害に興味あると知っていたことが大きかったです。デザイナーさんとは、小さなことでも共有できるようにしていて、それが利用者の口癖をデザインに入れるなどの工夫にも反映されたりします。製作したものの価値が増すように、プリントTシャツに刺繍を入れて1点ものにしたりもしています。

第2部：トークライブ 「コアチョコ流Tシャツのつくり方」



〔販路について〕

姫乃さん：「販路をどうしたら良いかわからない」という悩みがあると思いますが、どのようにされましたか。

MUNE さん：最初に売ったのはフリーマーケットでした。姉が借りたフリーマーケットのスペースで「Tシャツ作ったばっかだから売っていい？」って売ったのがコアチョコの初売り。まだインターネットより現場で見ないと信用できないような世界でしたので、デザインフェスタとかがメインの売り場でした。その後、ネット販売を始めましたが、Eコマースが定着するかなり前からだったので、サイトに商品をアップし、欲しい人にメールしてもらって振込確認した後に発送するような、アナログな仕組みでした。

〔デザイン、制作について〕

姫乃さん：題材選びや、デザインへの落とし込みについて教えてください

MUNE さん：もともと好きなものを題材にしていました。それは今も同じです。デザインソフトはフォトショップとイラストレーターを使っていますが、独学です。Tシャツ作りに必要な知識だけを取り入れているのでカラー対応はしていません。漫画や映画などのキャラクターTシャツを作るときには、まず原作を買って、全部観たり読んだりして、良いシーンを切り抜いて配置します。作品の熱を伝えないと、その作品のファンががっかりします。ファンの期待を越えないといけない。そのためには原作読んでないとわからないものがあります。Tシャツの文字の色は、作品やポスター・パッケージに出てくる文字に合わせます。怪獣なら怪獣の色、ダダ星人であれば白など。売れるためにどうするかとか考えず、自分のバランスでカッコイイと感じるものを作っています。



〔商品の露出、宣伝について〕

姫乃さん：多くの方に、手にとってもらえるにはどうしたら良いでしょうか。

MUNE さん：多くの目に触れさせることは、制作に費やす時間と同じくらい大切です。自分が欲しいと思うTシャツに合うロゴなどスキャンして手刷りする形で始めましたが、ライブハウスに着て行ったら「どこで売っているの？今度来たときに買うから持って来て」と言われて需要があることがわかって広がっていきました。そういった形を3、4年やってから、下北沢に店を出しました。

〔グッズとしての、Tシャツの良さについて〕

姫乃さん：私は地下アイドルをしていたのでTシャツは多く作りました。同じTシャツを着ると、恥ずかしさと同時に連帯感が湧きます、Tシャツで人が繋がるんですね。Tシャツは生活に密着していて、グッズとして買いやすいし実用性があります。Tシャツは何枚あっても良いですし、着ているTシャツでセンスが出るし、相手の好きなものが見えるのも良いですね。

MUNE さん：Tシャツは何枚あっても壊れません。一番気軽に一番カジュアルにいけるものなので、その人の自分のセンスや好きなものが一番出やすいんじゃないですか。

〔売り方や値付けについて〕

姫乃さん：ハロハロ一番館さんが、『3000円だと高かったんじゃないか』とおっしゃっていましたが、熱量のある人の作品としては全然高くないと思います。UNIQLOとは全然違うものなので…。一番つらいのが在庫ですが、手刷りで売る分だけ自分で刷るってやり方でも良いと思います。

MUNE さん：好きなことをやってお金をもらうということは、すごく一番シンプルなこと。そこに喜びを感じてもらえればいいのかと思います。そのために、いろんなところで売ったり、人と触れ合って、正當に評価してもらうことが大事ですね。

〔参加者のアンケートより〕

人材育成研修について：開催場所・ゲストが、我々が普段なじみのない方だった。福祉施設関係者だけでなく、Tシャツファンや地下アイドルファンが福祉施設の取り組みを新鮮に受け止めてくれた。福祉関係者からも、普段交流のない人たちの話を聞けて良かったという意見があった。

■講師コメント

■ハードコアチョコレート MUNE 氏

研修会を通じて、一部作品を拝見させていただきました。

その自由な発想・着眼点に一瞬で目を奪われました。

私たちハードコアチョコレートは商業的な要素も加味してデザインを構築していかなくてはなりません。尚更、その自由さに羨ましさを感じました。

自由な発想こそアートの肝であり、それを最大限に発揮できる生きたキャンバスこそ「Tシャツ」だと思っています。施設で生み出したものを是非、世界へと発信してもらいたいのです。その可能性は無限大だと思います。

■姫乃たま氏 コメント

研修会で司会をさせていただいて、私自身も初めてアート活動をしている福祉施設があることを知りました。実際に作品を拝見させていただき、利用者さんたちの溢れ出る創作意欲と、それに寄り添って世の中に届けようとする施設のスタッフさんたちの熱意にも心打たれました。

縁がない人にとっては「福祉施設」も「アート」もどこから関わればいいのか、なかなか取っ掛かりがありません。そこでTシャツのような身につけられるグッズを作って販売するのは、作品を気軽に届けて、手に取った人に身近に感じてもらうとてもよい方法であり、そこに焦点を絞って研修会を開いているのもユニークだと思いました。

＜講師＞ MUNE さん

1973 年生まれ
東京都出身
Tシャツブランド「ハードコアチョコレート」代表・デザイナー。年間 100 型以上のTシャツ全てのデザインを生み出し、Tシャツイベント等も開催

＜司会＞ 姫乃たま さん

1993 年生まれ
東京都出身
10 年間の地下アイドルを経て 2019 年にメジャーデビュー。同年 4 月に地下アイドルの看板を下ろし、文筆業を中心に数多くのトークイベントに出演。作詞・歌唱などの音楽活動もしている。

支援センターへのヒアリング コロナ下においての活動について

昨年度に続いて令和2年度も、新型コロナウイルスの感染拡大による影響下でのスタートとなりました。各支援センターは苦慮しながらも前向きに取り組み、すべてをマイナスに捉えずプラスにつなげていくためのアイデアや工夫もたくさん生まれております。また、事業所や障害のある人たちから、これまでになかった声を聞く機会にもなりました。

＜ヒアリング内容＞	＜支援センター＞
1) 苦勞した点	東 京：アール・ブリュットサポートセンター ライツ
2) 工夫したこと	千 葉：千葉アール・ブリュットセンター うみのもり
3) 新たに発見したこと・気づいたこと	神奈川：神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター
4) 今後必要と思う取り組み。	埼 玉：アートセンター 集
こんなアイデアが浮かんだ。	埼 玉：ART(s) さいほく
5) 福祉事業所や本人からの訴え、相談の事例	山 梨：YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター
6) その他このコロナ渦において思ったこと	

アール・ブリュットサポートセンター ライツ（東京）

1) 苦勞した点

今年度は、緊急事態宣言が2回発出され、1回目は事業が始まった中での宣言だったので、「この1年、事業はようになるのだろう」と不安になったのを覚えています。新型コロナの感染拡大状況を見ながら、内容を変更しつつ進行することが苦勞した点です。また、イベントなどについて、今年度は参加が難しいとお答えになる事業所も複数ありました。そして、オンラインを活用しましたが、そのシステムを理解することから始めたので、オンラインで何ができるのかを考えることに苦勞しました。

2) 工夫したこと

オンラインの活用です。打ち合わせや研修、座談会の開催をオンラインで行いました。イベントでは、実際にワークショップを行うのではなく、日頃行われているワークショップを撮影し映像で発表するなど、人との接触を避け、密にならずに観覧できる発表の機会を工夫しました。

3) 新たに発見したこと・気づいたこと

オンラインの開催は、参加者の反応がどうか不安でした。開催後、「自分だけの空間で聴講できるので集中できた」「自分の日時に合わせられるし、会場まで行く必要がないのは助かる」という感想をいただきました。今年度は人と会うことが本当に減りましたが、研修など、会場に人々が集まるからこそ生まれるつながりがあると思います。そのように、実際に会うことの大切さを改めて感じました。

4) 今後必要と思う取り組み、浮かんだアイデア

オンラインシステムは便利なツールなので、「今後もオンライン開催を望む声が多く聞かれるのではないか」と思いました。但し、技術面や費用面で、リアル開催とどのように両立するのかを考える必要があると思います。

5) 福祉事業所や本人からの訴え、相談の事例

福祉事業所からの相談は減りました。全体の相談数の中の割合も減り、数は昨年度の半分以上でした。個人の方からの相談は、家の外に出て活動をしたいと思っているので、アトリエなどを教えてほしい、という相談が目立ちました。

6) その他このコロナ下において思ったこと

ワークショップなどを行えず、人と触れることができないことが残念でした。新型コロナの影響で、活動を中止する福祉施設やアトリエがある中、家にずっといることが、障害者にとってはやはり負担だったと感じます。生活のリズムが変わってしまうことで、利用者さんに負担がかかることはもちろんですが、ずっと一緒に過ごすご家族を支えることも大切だと感じました。また、支援センターとしては、全国連絡会議やブロック連絡会議がオンライン開催となり、センター間の情報交換や共有がままならないことが、残念でした。

千葉アール・ブリュットセンター うみのもり（千葉）

1) 苦勞した点

企画した講座、イベントの全てがコロナの影響を受け、変更になったことです。もっと見越して計画を立てるべきだったと反省しています。オンラインでの関わりが主となってしまったので、ネットワークづくりに苦慮しました。

2) 工夫したこと

予定していた内容は展覧会以外は実施できました。その中でも、オンラインに舵を切って対応したことは工夫した点と言えます。

3) 新たに発見したこと・気づいたこと

県内で芸術活動に取り組んでいる方がたくさんいらっしゃるということがわかりました。また、その方々をつなぐネットワークが無いので、それをどう構築するかが課題だと気づきました。

4) 今後必要と思う取り組み、浮かんだアイデア

千葉県独自の取り組みを模索したいと考えています。地域の特性や特産物の使用等を考えられたらと思っています。

5) 福祉事業所や本人からの訴え、相談の事例

「自分たちの施設でも取り組みうと考えているけれど、どうすれば…」という意見を伺いました。具体的にどのようなものが出来るのか、障害者芸術とはどのようなものなのか、という質問が多かったです。質問者は具体的な返答を求めているように感じました。

6) その他このコロナ下において思ったこと

次年度も申請予定ですが、「コロナの影響に左右されない内容を検討しないと」と頭を悩ませています。映像での関わりが多くなってしまいますが、映像だから出来る、生で体験する事では得られない付加価値をどう見出すのかだと考えています。

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター（神奈川）

1) 苦勞した点

センターが開設して1年目でしたが、ご挨拶を含めた関係団体への訪問など、情報収集やネットワークづくりが難しかったです。アーティストとともに障害福祉サービス事業所等に訪れて、ダンスや音楽等の取組みを行なうワークショップや、勉強会はオンラインでの開催が中心となりました。直接会うことができないことで削がれてしまう体験を、オンラインでどう補えるか試行錯誤しました。

2) 工夫したこと

オンラインのダンスワークショップでは、事前に施設職員のみに向けたワークショップを行ない、身体を動かす感覚や、触れ合い方のポイントなどをアーティストから伝える時間を作りました。また、参加者が動画を見るだけと受け身になってしまいがちなので、同時に同じ体験をしている実感が持てるような工夫（例：講師と参加者が同じモノを持つ）をし、アーティストと参加者の間で言葉以外のツールを活用し、双方向のコミュニケーションが持てるような工夫をしました。

3) 新たに発見したこと・気づいたこと

オンラインワークショップでは、インターネットやデバイスの環境が整えば、「入所施設で、居室から出ることが難しい方」や、「障害特性上大人数での活動に参加す

ることが難しい方」との取り組みができるのではないかと思います。また、勉強会をオンライン開催したことで、仕事や家庭の都合上なかなか会場に出かけて参加することが難しい方にも届けることができました。オンラインならではの工夫を追求することで、広がる可能性もあるのではないかと感じました。

4) 今後必要と思う取り組み、浮かんだアイデア

相談に寄せられる障がい当事者からの声や、勉強会参加者のアンケートを見て「やはり対面でセンター職員や多分野の人と交流する機会が必要」だと感じました。感染の拡大状況を見ながら、相談会の開催など少人数で集まれる機会を、県内の複数地域でつくればと考えています。

5) 福祉事業所や本人からの訴え、相談の事例

障がいのあるご本人からの相談では「発表の機会となっていたイベントが中止となってしまった」「参加していた俳句サークルがお休みになっている」等、新型コロナウイルスの影響で発表や交流の機会がなくなってしまったという声が多く聞かれました。できる限りお住まいの地域の情報を伝えるようにしていますが、タイミングによっては情報がない場合もあります。継続的にやりとりできる関係を作りたいと思います。

6) その他このコロナ下において思ったこと
遠方に出かけられない、大勢で集まらないなど、さまざまな制約のなかで活動の工夫が求められた1年でした。そのような状況でも表現を通して誰かとつながりたい、またそのような表現を支えたいという想いを感じる

アートセンター集（埼玉）

1) 苦労した点
事業の開催可否について、コロナの状況に合わせなくては いけなかったため、会期の直前まで判断が難しかったです。リモート会議は、場所や時間が拘束されない点は便利ですが、会議が一方通行になりがちである為、積極的に声をかけたり、意思疎通を意識しました。また休憩中や会議後の参加者同士の懇親が難しく、近況や雑談などの話ができないのはデメリットですね。オンライン環境の整備も、事務局だけでなく参加者にも周知する必要がある為、配慮が必要でした。展覧会について、搬入出や作品手配のやりとり全てに対して、体調管理や消毒作業など、例年以上に気を配らなければならない事が増えて大変でした。相談業務について、これまでであれば来訪していただいて相談を受けていましたが、福祉の現場という場所柄もあり難しかったです。障がいがある人にとって、オンラインという技術が必要なメディアは、相談機会として適切なようには思えず、浸透にはまだまだ時間がかかるように思います。ですので、一人一人に合った形での相談機会を今後も築いていきたいと思ひます。

2) 工夫したこと
TAMAP±0の取り組みの中でも、月1回の定例会は特に大切にしている事業なので、オンラインでの会議ができるように各施設に確認を取ったり、必要な相談に乗ったりと手配をしました。展覧会に向けた作品選考会も、3密を避けるために会場で例年行ってきたものから、各施設で行うミニ選考会へと変更。展覧会来場者の密を避けるための人数規制、検温の実施や連絡先の記入、また来場者アンケートの記入もオンラインでの実施としました。

3) 新たに発見したこと・気づいたこと
上記のミニ選考会は、他に実施した研修会とも同様、遠方の方の参加も容易になり、施設内でのアート活動の広まり・深まりに役立ったというアンケート結果が多く届きました。芸術文化活動の推進は、不要不急な用事を避けなければならない新しい生活様式とは相容れないものであり、美術業界では多くの展覧会が中止となった1年でした。障がいのある作家にとって、展覧会が唯一の社会との接点である方もおり、そのような施設や団体に属さない個人の作家は、発表機会を失うことをとても心

場面は、各事業の中で見られました。他県の支援センター等、全国でも工夫を凝らした事業がたくさん行われていましたので、自分たちの活動と照らし合わせながら、よりよい活動に繋げていきたいと思ひます。

配している様子でした。当事務局が毎年行っているアート企画展も、状況によっては開催が危ぶまれましたが、規模は抑えつつも今年も開催決定したことを作家に伝え、本当にうれしそうな安心した声を聴くことができました。会期中、例年行ってきたアーティストトークなどの作家主体のイベントは行えませんでした。多くの作家が会場を訪れ、また来場者も例年とさほど変わらない人数が足を運んでくださいました。会場は3密を避けるために、いつもより静かな時間が流れていましたが、皆作品を楽しんでいる様子でした。この展覧会を共に作り上げてきた作家たちを通して、継続してきたということ、そしてこれからも継続していくという事が、誰かの励みになっているということに今回改めて気づく事ができました。

4) 今後必要と思う取り組み、浮かんだアイデア
様々な事業の映像やオンラインでの実施には、時間と場所を選ばないというメリットはありますが、現地の空気を共有、体感することで参加者に身に付くこともあるので、参加側が自由に選択できるようにしていきたいです。ネットワーク団体が大きくなってきているので、アート活動に関する悩みの濃淡も多様になってきています。現在行っている展覧会実践やセミナーなど大枠の人材育成事業を柱にしつつも、ブロックや他センターにも協力を仰ぎ、(リモートでの)アトリエ紹介や現場視察など、細やかなサポートに力を入れていきたいと考えています。

5) 福祉事業所や本人からの訴え、相談の事例
コロナ禍の影響で、創作環境に関する相談や、発表機会に関する相談が多いです。県内に在住の方へ、表現活動状況の紹介や、全国のセンターから集まる公募展情報を提供。悩みをヒアリングしていくと、表現活動以外の支援が大切なケースも多い為、継続性のある関係を築くことを大切にしています。

ART(s) さいほく（埼玉）

1) 苦労した点
南関東・甲信ブロックは感染者数も多く、事業所訪問などの実施ができませんでした。特に苦労した点は、日々変わっていく状況に関係各所との連絡・調整にかなり多くの時間を割かれたことです。会場貸出しの休止や貸出し自体ができなくなる可能性もあったので、判断が難しいことが多々ありました。

2) 工夫したこと
作品展を、インスタグラムのライブ配信で開催することになりました。本庄市と共催の企画でしたが、市としてもこのコロナ下での実施には慎重にならざるを得ませんでした。一方で、コロナ下でもコツコツと制作されてきた作品の発表機会がなくなってしまうように、様々なアイデアを出しながら最終的に無観客でInstagramでの配信にトライしました。あわせて本庄市のシンボル的な建物（煉瓦倉庫）で実施することにも意義があると考えました。

3) 新たに発見したこと・気づいたこと
作品の中にコロナウイルスに関連する作品が見られるようになったことです。普段は自分の好きなことしか描かない方が、ある日マスクをした人物を描きはじめたりと、この状況に影響を受けていることを知りました。話を聴くと「お出かけができない」「観たい映画が公開されない」などたくさん思いが溢れてきました。

4) 今後必要と思う取り組み、浮かんだアイデア
様々な分野でオンラインの活用が工夫された一年であり

YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター（山梨）

1) 苦労した点
年度当初はある町と協力し、街中で大きくイベントを行うことを計画していました。町民と観覧者のふれあいが大きな目的の一つであったため、断念せざるを得ませんでした。集まることなく、多くの方が関わり事業を行う方法を思案し、「だるまプロジェクト」を行うこととしました。例年、福祉関係者、美術・デザイナー、特別支援学校、一般など様々な立場の方々が集まり意見を述べ合う場として行ってきたアートカフェミーティングも、3密を避けられないということで形を変えざるを得ませんでした。司会とファシリテーター、ゲストのみが集まってミーティングし、その様子をオンラインを使って配信する形に切り替えました。現場での撮影に加え、遠方の方には

ました。オンライン配信では、操作・配信・映像作成など、これまでに経験しなかったスキルも求められ、戸惑いの連続でした。そういった中で、自分たちだけで解決せず地域の資源を頼ることにしました。地域メディアのひとつであるケーブルテレビ局に相談をしたところ、「月に一回、障害のある人たちの作品や制作風景等を紹介するコーナーを設けてくれる」という思わぬ展開になりました。障害のある人たちのアート活動のことを知ってもらえる機会にすることもできました。このことから、「地域にはもっと頼りになる資源がたくさんあり、協力を得ることもできる」と、学びました。支援センターだけで解決せずに、広い視点を持つことが大切だと感じました。

5) 福祉事業所や本人からの訴え、相談の事例
アトリエで、「はやくコロナがおさまってほしい」「お出かけがしたい」という声が、作品制作の合間によく聞かれました。「感染防止の取り組みが優先になるため、作品展への出展を取りやめた。(入所施設)」という声や、「作品が展示されても、作者本人を連れて観に行くことができなかった。」という事例がありました。

6) その他このコロナ下において思ったこと
コロナウイルスの感染拡大は福祉だけの問題ではなく、健康や社会全体に関わることでもあるため、企画の実施・施設訪問・見学・会議の持ち方などにも、広い視点で考える必要があると考えさせられました。これまでにない事態で、試行錯誤を繰り返しての取り組みですので、うまくいくこともいかないこともあります。「地域の人たちとの協働が大切になる」ことを実感した一年でした。

ZOOM でのご参加を頂いたが、撮影環境設定やネットワークトラブルなど慣れない事への対応が難しかったです。当事者の方によるハンドメイド制作ワークショップや、音楽療法の先生方による「音と遊ぼう」ワークショップを計画していましたが、人を集めることができないので、すべて動画での配信に切り替えることとしました。そして、撮影や編集を自力で行うことに限界があり、外部へ依頼しました。

2) 工夫したこと
展覧会について、開催可否を県とぎりぎりまで協議しました。感染拡大防止対策として、「ギャラリー入り口にて手指の消毒、検温、マスク着用のお願い」「来場者名簿に氏名、連絡先の記入」「体調不良（例：37.5℃以上

の発熱・咳・咽頭痛・味覚障害等の症状)の方は来場をご遠慮いただく。」「来場者が多い場合は入場を制限する(15名を目安とする)」「大きな声での会話の制限」「新型コロナウイルス感染拡大状況により、内容の変更・中止の場合があることについてのインフォメーション」「スタッフの検温・体調管理・手指の消毒」「会場入り口を開放し、常に換気」「会場内・手を触れるもの・机等の定期的な消毒」などを行いました。

研修会・ミーティング・ワークショップについて、すべてオンラインにて開催。相談については、通常通り電話やメール等で対応しましたが、どうしても訪問が必要な場合、双方で対策を講じた上で伺いました。

3) 新たに発見したこと・気づいたこと

コロナ禍をきっかけに行うことになった「だるまプロジェクト」でしたが、例年とは違う切り口での発信であったことから普段関わりのなかった多くの団体や一般の方と繋がることができ、センターの認知度が高まりました。そして、オンライン開催をすることにより、悩みであった山梨県の地理的条件を解決できる上、県外の方にも広く参加していただけるという可能性を感じました。

4) 今後必要と思う取り組み、浮かんだアイデア

コロナ禍が始まって一年ほど経ちますが、ZOOM等のオンライン環境が当センターを含め周りでも整ってきたとの声を聞きます。来年度はこちらから一方的な配信に留まらず、ライブでミーティングを行えるような環境づくりをしていきたいです。

5) 福祉事業所や本人からの訴え、相談の事例

一般企業の方(山梨の福祉や医療を取り上げたフリーペーパーを作成している。)で、「コロナの影響があり思うように事業ができない中、新たに会社のサロンや駐車場を使ってマルシェを展開することを考えている。同じようにコロナ禍の影響を受け、授産品や農産物、アート作品の二次利用商品などの販売にお困りの事業所の商品を出品してもらえたらと考えている。ご紹介いただけないか?」というご相談がありました。商品を作っている事業所や個人10軒ほどにご連絡し、参加ご希望の方と相談者をおつなぎしました。マルシェは6月に第一回目を開催して以来、毎月第4日曜日に継続して行われています。ご紹介した事業所や個人の方の中でコンスタントに参加される方がいたり、紹介の輪が広がって様々な福祉関係者が関わっています。一般の出品者とフラットに商品が販売され、客層もさまざまなので事業所や商品を知ってもらう良い機会になっています。コロナが収

束したら、マルシェの中で当事者のワークショップを行うこともご提案いただいています。

6) その他このコロナ下において思ったこと

いつものように「会えない」「集まらない」ことを、ポジティブに捉えなおして事業を行ったことで新しい発想が生まれたり、参加者間で連帯感が生まれたり、例年よりも熱い気持ちを寄せていただくことができました。美術や舞台美術の表現は「会える」「集まる」ことを前提に行うことが本当は一番ですが、発信の仕方は工夫できることが分かりました。

コロナ下で制作された作品

コロナウイルス関連の報道や話題、作品にも影響を及ぼしました。「作った時の気持ちは?」と作者へ聞くと、「コロナの終息を願う気持ち」「みんなが感染しないよう祈る気持ち」「自分の好きな映画を早く観に行きたい」など様々です。



① マスクをしたバレリーナ

Mさんは、会場にバレエを観に行くほど、クラシックバレエのファンです。いつもバレリーナの絵を描いており、ある日マスクをしたバレリーナを描きはじめました。このコロナ下で、自身の不安も強く「早く終息してほしい」という気持ちと、「バレリーナの感染の心配」「早く会場に観に行きたい」というような、様々な気持ちが込められているようです。



③ おりづる

「休日に好きな映画を観に行くことができず、イライラしてしまいました、」と連絡帳に記載されたその日、作成したおりづるの羽に、「新型コロナウイルス」と書かれていました。普段、テレビニュースなどは観ない方なので、コロナの話題にも関心がないのかと思っていました。本人の新たな一面に気づくことができました。



② アマビエの折り紙

大量のアマビエの折り紙作品。折り紙にはクリップがついており、磁石のついた釣竿も準備。会場に訪れた人の感染予防を折り、アマビエ釣りというアイデアで出展、各自お土産にアマビエを持ち帰ってもらいました。この企画のためにアマビエの折り紙を毎日折りつづけたそうです。



④ 祈り

大好きな演歌歌手がコロナにかからないよう、全身全霊で祈っています。

評価委員会実施報告

2021年3月11日、3名の評価委員をお招きし、アーツさいほく主催で評価委員会を開催しました。アーツさいほくによる実施事業説明をした後、説明や実施動画視聴を踏まえて、評価委員との質疑応答や意見交換を行いました。

【司会・説明】 丹羽彩文、石平裕一（アーツさいほく、社会福祉法人 昴）

評価委員



かしわ 哲

1981～83年にNHKの「おかあさんといっしょ」で5代目「うたのおにいさん」を務め、「すずめがサンバ」「きみのなまえ」などの童謡を制作。94年、知的障害のある人たちとロックバンド「サルサガムテープ」結成。1999年「まひるのほし」でメジャーデビュー。2011年4月、活動拠点として「全肯定型」を掲げる福祉サービス事業所、NPO法人ハイテンションを神奈川県厚木市に設立した。



野澤 和弘

毎日新聞記者として、いじめ、ひきこもり、児童や障害者虐待の報道に携わる。論説委員を経て2019年に退職。現在は植草学園大学副学長（教授）。一般社団法人スローコミュニケーション代表、東大生が障害者のリアルに迫るゼミ講師、上智大非常勤講師なども務める。



森 直子

NPO法人劇場創造ネットワーク「座・高円寺」企画・広報担当。1963年生まれ。東京女子大学在学中より、劇作家・演出家、如月小春アシスタントとして働く。2001年よりせたがや文化財団にて、世田谷パブリックシアター広報担当。2008年より座・高円寺。立ち上げから、現在に至るまで、劇場のブランディングと広報業務を担う。

< イベント「アートセッション in 横瀬」 「アートセッション～表現のタネたち～ vol.2 座談会」について >

かしわ委員：（鈴木さん[神奈川県]の、歌のパフォーマンス動画を見て）本人がオリジナル曲を最初から全部仕上げるのはあまり例がないです。内容についても、（障害者は）「こんな私でもみんなに支えられて夢を持っています」とか優等生な内容を歌うことが多いですが、そういう感じが全く無いのはとても良いです。楽しさを紡ぎ出していくことは絶え間ないクリエイティビティが求められます。芸術表現を、発展させたり引き出したりするには「創造性やある種のセンス」が必要。周りが絶えず生き生きとしていないと、新鮮なものは生まれてこないような気がします。

野沢委員：（2つのイベントの）動画にすごく可能性を感じました。今までは、障害者の文化芸術というと、絵とか陶芸作品とかオブジェとかを展覧会に持ってきて展示し、それをみんなに見てもらう。または、ステージ

という場を用意してステージを見に来てもらう。つまり生活の場から切り離れたところで、光をあてて演じてもらったり展示したりする。これはこれで王道でいいのですが、今のいくつかの動画は彼らの生活の場における芸術性みたいなものを見ることができるとい点で「生」な感じがして、「これだな」と思いました。静岡県浜松のクリエイティブサポートレッズを見に行った時に、同じような感覚を受けて、彼らが活動の場、生活の場において自然にやっていることを見に行くことで、何らかの芸術性や文化を感じさせて伝えてくれるのです。しかし、それもその場に行かないと見れないのですが、動画にすると多くの人が見ることができる。生で見るとは違うかもしれませんが、ひとつのジャンルというか回路として、コロナ下やその後も、すごくいいものになるか

もしれないと思います。しかもこれは世界に広がるな、上げられるなど。絵、陶芸、オブジェ、歌、ダンスなどでは無いところでも、もっと彼らのクリエイティビティや芸術性を広げていけるかもしれないと感じます。ここでは、彼らはあくまでアクター。それを作る側、クリエイターやディレクターが、どういう風に育てていくかが、一つの大きなチャレンジかなと思います。

森委員：芸術の、それぞれの世界観をどうやってそこに表すかを考えた時に、「ご本人の意思がどのくらいそこに介入されているのか」をいつも気にして見えています。場所が閉ざされたところや、あらかじめ告知したところに人が見に行くことに関して、もう少し敷居を下げられないかなと思います。「知らずに迷い込んでしまったら、面白いものが待っていた」というような仕掛けができないだろうかと思ったりします。秩父などは、「観光に来た人がたまたま学校に迷い込んだら、おもしろいものがあった」というような導線になると、日常の中に息づいた彼らの世界観が生きてくるんじゃないかなと、思いながら観ていました。

事業に対する自己評価

アーツさいほく丹羽彩文：この事業を通じてもたらしたい変化について、「障害者と支援者の関係性の再構と共生社会の実現」、「障害者の芸術文化活動の社会的評価の変革」でした。そういった大きい目標のための成果目標として、1つ目は「障害者芸術文化支援センター未設置県へのアプローチ強化」、2つ目は「芸術文化活動に対する視野を広げるための取り組み」、3つ目は「事業成果のアーカイブ構築のための取り組み」を設定しました。

1つ目の「未設置県へのアプローチ強化」について、長野県に2度訪問し、設置に向けた準備を進めようと考えておりました。電話での状況等の確認、ブロック会議へ参加の呼びかけを行いました。昨年度の台風19号東日本台風で長野県が甚大な被害をうけていていまだ復旧復興のさなかで当初予定していた予算は見直されて復興中心に向けられており、センター設置の予算は確保のが困難とのことでした。その後、7.8月に訪問調査を打診しましたが、事実上のロックダウン状態となり、ブロック会議への参加も無かったため。1つ目の目標に対しては果たせなかったと判断しております。

2つ目の「障がい者や現場で支援をする職員が芸術文化

活動への視野を広げる」ということについて、新たな事業所から出展してもらうことや、都県支援センターが表現のタネに対して共通理解を持ち、1人以上の出展してもらうことを目標としました。合同展示会、オンラインでの合同展示、合同展示に向けるオンライン会議、人材育成研修に取り組み、19人の作家と9団体の協力を得ました。合同展示の出品者・団体へのアンケート結果から、展示の方法や展示場所について新たな気づきがあったという意見が寄せられ、人材育成研修では、福祉関係者よりも一般の参加者が多かったため、福祉関係者の視野が広がったかは不明であるが、一般への普及啓発の機会となり、一定の成果があったと判断しています。

3つ目の「事業成果のアーカイブ構築のための取り組み」について。取り組みとしては・合同展示会・オンライン合同展示・ホームページの開設を行いました。新型コロナウイルスの蔓延により、オンラインでの展示等の手法をとることが多くなりましたが、必然的に映像での記録が増えました。ホームページを開設し、実施した事業のレポートの公開を行いました。作者一人ひとりを紹介するようなコンテンツは、まだホームページ上に作成できていません。また、オンライン合同展示会について、作者一人ひとり取材することはできていますが、それをテキストデータ等のアーカイブ化する準備までにはまだ至っておりません。一定の成果があったと判断しておりますが、引き続き今年度収集できた映像や画像等を、年度内にできる限りアーカイブ化することを考えております。

アーツさいほくによる自己評価および合同展、研修会のアンケート内容をうけて

かしわ委員：（アーツさいほくの）お二人が発言されていた「敷居を低くしていくこと」は、とても大切だなと思います。展覧会会場でなく映像でやっていくことの自由。「障害者の芸術文化活動への社会的評価の変革」について私は考えるのですが、今までの芸術表現に対するものと同じようなものを求めていく流れになっていくと、日常から離れたとっつきにくいものになっていったり、親しみ気楽にできなくなっていくと、かなりまずいと思います。今日の動画を拝見すると、突き抜けちゃってる自由さとか、我々がしばられてるものをあつけらかんと突き抜けている、表現のダイナミックなものがそこかしこにありました。そういったものが芸術文化活動ということで、何かから制限され無いためにどうすれば良いのか考えることが大事です。

もう一つ、支援者との関係性について。人材育成は、これからとても大切です。福祉現場において、芸術活動と日々の福祉的な日常は別だという風に二つを区分けして見がちだと思います。そうすると自由な発想は出てこなかったりするので、支援スタッフがどういう関わりを持っていくかということが、大きなテーマだと思います。

野沢委員：行政から求められるものは、大事なものからどんどんずれていくようなことがあって、すぐに評価や分かりやすい数値を求められたりで、何のためにやっているかわからなくなってしまいがちです。私はわざと、「すぐに成果が出るものはすぐに成果もなくなるものです」なんて嫌味を書いたりすることがあります。お金を出す側としては、一般市民に説明しなきゃならないということでそれはそれでわかりますが、「なぜ障害者の文化芸術が必要なのか」という論を深め、新しい基準を行政や一般市民に納得してもらえるようなものにして発信していくことが絶えず必要かなと思っています。

未設置県への働きかけも勿論必要です。設置しない理由もあり、予算もあまり多くないわけですが、ちゃんとしたものをやるには予算もつけてもらわなきゃこまります。社会的に、我々が「いかに意義があるのか」ということを深めていく、それは各センターが横断的に議論しながら探求していくしかないかなと思います。それを社会的な権威のある人に発信してもらったりしながら、あの手この手で進め絶えずやっていかないと、だんだん押し戻されていきます。そこを全体としてまとめていく上で、その辺の照準の絞り方みたいなことをして頂ければと思います。

森委員：みなさんと同じ感覚ですが、見る者と見られる者の関係性、作品を私たちがどう見るかという時の敷居はなるべく無くしていくべきだし、見る側への働きかけがまだちょっと足りないのかなと思うところがあります。ただ、一生懸命アピールすればするほど、見る側が構えてしまうという、そういう側面もあるかもしれません。私が活動している場所は高円寺で、全然分け隔てなく見られるものが、今回の秩父の方でもみられましたし面白く感じるものがたくさんありました。そこに「障害者の」ということが入ってしまうと見る側に必要ない「眼鏡」がかけられてしまうような気がするので、なるべくそこを取っ払って見てもらえる努力も必要かもしれません。

本活動へのエールやコメント

かしわ委員：敷居を低くすることや、色眼鏡で見られないためには、既成事実の積み重ねが必要だと思います。いちいち感動して泣いていられないっていうくらい、どんどん既成事実を積み重ねていく。サルサでいえば「一回泣いたからいいでしょ？だからもうその後はみんなで踊ろうよ」というような形で。秩父のイベントでもそうでしたが、みんなで大騒ぎしていくっていう、そこでどんちゃん騒ぎをしていく中で周りの人たちが「何をしているんだろう？あんな楽しそうなことをしている人達はなんなんだろう？」と思うような。そういうことこそが、社会的評価の変革ではないかと思うので、みんなでエネルギーを燃やしてどんちゃん騒ぎをしていくような方向でいきたいなと思います。

野沢委員：障害者支援は、2005年に自立支援法ができてから大きく変わりました。予算も増えだし、近代化も進みましたが、そろそろ賞味期限かなと思っています。つまり、「働いてお金を得て社会的自立をする」という概念の障害者支援だけではすまなくなってきたということです。世の中全体、近代の産業社会や資本主義、科学主義などが限界に近づいているというような。人の働き方を見ても、これからは、AIが色んな職業の仕事を行い、フルタイム正社員の働き方がガラガラ変わっていく時代。古い正社員モデルの障害者の自立を目指すことを、早くやめなきゃいけないと思います。

今回見たような活動の中にこそ、我々が見逃してきた人間らしい「生き方のたね」があります。我々がキュレーターとして、彼らの素材の良さを、社会の大変革に向けて力を出して、踏ん張る時だと思います。かしわさんはアーティストックに、私は論説委員の垢が残っているのでこういう言い方になりますが、私も夕方以降の人生を楽しんでいこうと思います。

森委員：私が働いているのは劇場の中ですが、劇場も建物に囲まれて中が見えないと、人との交流ができません。だから、囲うということは守ることであるかもしれませんが、逆に世の中と切り離してしまう可能性があります。その中の人にアプローチしていくためには、まず「場を開いていくアプローチ」、そして「場を知ってもらうアプローチ」が大切じゃないかなと思います。どんどん普通の人が、こういった場所にアプローチできるような、そういう仕掛けを広域に広げていただければ、素敵な人たちがもっともっと世の中に出てくるんじゃないかなと思っています。

今年度に向けて事業評価と今後に向けて

障害者芸術文化活動普及支援ガイドに基づく事業評価

平成30年度厚生労働省障害者総合福祉推進事業により、特定非営利活動法人日本ファウンドレイジング協会がとりまとめた「障害者芸術文化活動普及支援ガイド」を使用し事業評価を行った。

【障害者芸術文化活動普及支援事業】

障害者による芸術文化活動にもたらしたい変化について

(最終アウトカム)

- I. 障害者と支援者の関係性の再構と共生社会の実現
- II. 障害者の芸術文化活動の社会的評価の変革

令和2年度における本センターの成果目標

- I. 障害者芸術文化活動支援センター未設置県へのアプローチの強化
- II. 芸術文化活動に対する視野を広げるための取り組み
- III. 事業成果のアーカイブ構築のための取り組み



<成果目標その1>

①優先的に取り組んだ成果目標

未設置県へのアプローチを強化し、ブロック内全都県に支援センターが設置されること。

②「①」の目標達成を判断する指標・基準

- ブロック内唯一の未設置県である長野県に支援センターが設置される。
 - 長野県の担当課を2度訪問し、設置に向けた準備が進む。
- ### ③「①及び②」の達成に向けて取り組んだこと
- ・活動の内容
 - 電話にて今年度の方針を確認。
 - 訪問調査の打診
 - ブロック会議への参加の呼びかけ

④「③」の結果、「①及び②」がどの程度達成できたか、それがどのようなことからわかるか

- 5月にコロナ禍における障害者芸術文化活動の実施状況を聞き取る中で今年度方針について確認した。昨年度の台風19号で長野県は甚大な被害を受け、当初予定していた予算がすべて見直され、復興に向けられた。そのため、支援センター設置の予算確保の見通しができなくなった。
- 7月、8月に訪問調査を打診したが、新型コロナウイルスの感染拡大により長野県への県を跨いでの訪問は難しく、同様にブロック会議も不参加となってしまった。

→上記の結果から、目標に対する成果は果たせなかったと判断している。

<成果目標その2>

①優先的に取り組んだ成果目標

障害者や現場で支援する職員が、芸術文化活動に対する視野を広げること。

②「①」の目標達成を判断する指標・基準

- 新たな事業所から、出品される。
- 各都県支援センターにより「表現のタネ」に対する共通理解を持ち、1名以上の作家が紹介される。

③「①及び②」の達成に向けて取り組んだこと

- ・活動の内容
- 合同展示会
- オンライン合同展
- 合同展示に向けたオンライン会議
- 人材育成研修

④「③」の結果、「①及び②」がどの程度達成できたか、それがどのようなことからわかるか

- 昨年度からの「まなざし展」を引き継ぎ、「表現のタネ」に着目した合同展示を1回、オンライン合同展示を1回開催し、17名の作家と9団体の協力があつた。
- 合同展示の出品者や団体へのアンケート結果からも、展示の方法や展示場所（廃校）について新たな気づきがあったという意見が寄せられた。
- 人材育成研修では、アンケートからも福祉関係者よりも一般の参加者が多かったため、福祉関係者の視野が広がったかは不明であるが、一般層への普及啓発の機会とはなった。

→上記の結果から、一定の成果があったと判断している。

＜成果目標その３＞

①優先的に取り組んだ成果目標

事業成果のアーカイブを構築し、必要な情報に必要な時にアクセスできるシステムを作り出す。

②「①」の目標達成を判断する指標・基準

- 事業所や家庭へのリサーチを通じて、創作活動に取り組む障害者や支援者への取材を行い、音声やテキストでホームページ上にアーカイブし、公開される。

③「①及び②」の達成に向けて取り組んだこと

- 活動の内容

- 合同展示会

- オンライン合同展示

- ホームページの開設

④③の結果、①及び②がどの程度達成できたか、それがどのようなことからわかるか

- 新型コロナウイルスの蔓延により、オンラインでの展示等の方法をとることが多くなった。そのため、必然的に映像での記録が増えた。

- ホームページを開設し、実施した事業のレポートの公開をすることはできるようになった。

- 作者ひとりひとりを紹介するようなコンテンツは、まだホームページ上に作成できていない。

- オンライン合同展示に当たっては、作者ひとりひとり取材することはできているが、それをテキストデータ等のアーカイブ化する準備までには至っていない。

→上記の結果から、一定の成果があったと判断しているが、引き続き今年度収集できた映像や画像等を年度内にできる限りアーカイブ化する。



今年度作成した ART(s) さいほくのホームページ

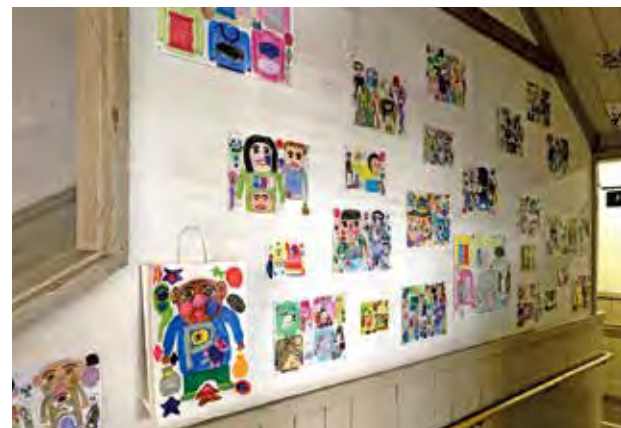
＜今後の展望について＞

①長野県担当者のブロック会議参加がなかったため、未達成に終わってしまった。

今後は障害者芸術文化担当課だけではなく、芸術文化担当課へのアプローチや同県の表現活動に取り組む福祉事業所・団体の調査、訪問等を積極的に行い活動の状況の把握や連携を図っていく必要がある。

②ブロック合同作品展では、5都県の支援センターの協力を得て、9団体17人の作家が出展。当センターが2018（平成30）年度から開催する展覧会を踏襲し、そのノウハウを活かして開催したため、開催する町の協力（場所提供、地域の団体紹介など）を得ることができた。各支援センターにこのプロセスを共有したことで、地域の文化資源などの活用や地域住民・行政との連携の参考として、活動のヒントになるのではと考える。また、人材育成研修会とブロック合同作品展（作家・団体対象）で行ったアンケートでは「日々の行為や表現には、周りの人たちも共に楽しんでいる様子がうかがえた」「日常的に行っていることが作品として出展され、利用者に対する保護者や支援者の理解度が増した」といった意見が寄せられた。

③オンラインでの取り組みが多かったため、映像での記録が増えた。ブロック合同企画のアーカイブを担うウェブサイトを開設し、映像などを公開。引き続き、収集した映像・画像をアーカイブするとともに、作家を紹介するコンテンツも制作予定。今後も、各支援センターとの事業目標や意義の共有のもと、それぞれの強みを活かした取り組みの提案や、課題をフォローし合いながら展開していきたいと考える。



本事業 における 専門アドバイザー

〔著作権等の権利保護関係の相談〕
川人 博 氏（弁護士 川人法律事務所）

大阪府泉佐野市生まれ

東京大学経済学部を卒業。

1995年川人法律事務所創立。

1988年から「過労死110番」の活動に参加し、現在、過労死弁護団全国連絡会議幹事長。

1992年から東大教養学部「法と社会と人権」ゼミ（全学自由ゼミまたは自主ゼミ）を担当。

厚生労働省・過労死等防止対策推進協議会委員

過労死弁護団全国連絡会議幹事長

過労死等防止対策推進全国センター共同代表幹事

内閣官房拉致問題対策本部

拉致問題に関する有識者との懇談会の有識者委員

東京弁護士会人権擁護委員会国際人権部会長

（2021年2月現在）

〔美術に関する専門家〕
吉田幸平 comeya ギャラリー

東松山駅徒歩3分の個人運営のギャラリー。

2015年より東松山および近隣地域の作家を中心に絵本原画展、イラスト展、手工芸品展等を開催。

2017年より、まちこうば GROOVIN の利用者さんの個展を5回開催。

〔コメント〕グラフィックデザイナーとしての経験を生かし、利用者さんの作品がより引き立つような展示を心がけています。作品を布地にしたり、ランプシェードにしたり、作品集にしたり、毎回違った試みをしています。GROOVIN のスタッフにご協力いただき、こちらから提案した画材やモチーフで新作を制作していただいたこともあります。福祉の現場とギャラリーが連携することで、利用者さんの新たな力が引き出されることもあり手応えを感じています。

comeya ギャラリーでの作品展示の様子



厚生労働省 令和2年度障害者芸術文化活動普及支援事業 南関東・甲信ブロック 広域支援センター事業報告書

＜運営＞ 南関東・甲信ブロック広域センター ART(s) さいほく [社会福祉法人昴]

＜連携＞ ■埼玉県障害者芸術文化活動支援センターアートセンター集 [社会福祉法人みぬま福祉会]
■千葉アール・ブリュットセンターうみのもり [社会福祉法人フラット]
■東京アール・ブリュットサポートセンター Rights (ライツ) [社会福祉法人 愛成会]
■神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター [認定NPO法人 ST スポット横浜]
■YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター [社会福祉法人八ヶ岳名水会]
■埼玉県
■千葉県
■東京都
■神奈川県
■山梨県
■長野県

＜専門アドバイザー＞ 川人博氏：弁護士 川人法律事務所（著作権等の権利保護関係の相談）
吉田幸平：comeya ギャラリー（美術に関する専門家）

＜アートセッション in さいほく 2020 アートセッション in 横瀬＞

出展協力団体 ■社会福祉法人清心会
■社会福祉法人いたるセンター イタール成城
■社会福祉法人友愛学園 はあとぴあ原宿
■特定非営利活動法人みのり福祉 障害者就労・生活さぽーとピース
■NPO 法人ユニークユニバース放課後等デイサービス UNICO
■地域活動支援センターひふみ
■社会福祉法人さがみ愛育会生活介護支援事業所のびやか
■社会福祉法人三富福祉会
■埼玉県立本庄特別支援学校

後援・協力 埼玉県 横瀬町
秩父市
皆野町

撮 影 末松グニエ文：アートセッション in 横瀬 表現のタネたち
栗原謙一：表現のタネたち VOL2 座談会

会 場 ほっこり堂 <http://tokigawa.info/hokkoridou/>

＜報告書制作＞ ライター：福島だいすけ
デザイン：吉田デザイン事務所

表紙イラストレーション：コバヤシカオル